

井村三藏こゝぞと膝を進めて、

「一言なし、一句もありません、拙劣の極、とんでもない大失策ですが、もし君が井村とすれば、あの場合、どうなさるね、實は今日それを伺ひかたく、あらためて弟子入に來ましたが、どうすれば宜しい」

川徳、天井を仰いで大口の高笑ひ、

「どうも仕ませんな、始めから手を付けませんよ、どうかしようとするのが、既に大間違で、どうもしないところに、するよりも寧ろ却つて貴君としての價値もあり、第一また御本人に對する忠實で、あの薪に井村さん油を注いぢやア大變だ、なぜ水をかけて消さなかつたんです、もし油を注ぐとすれば、その油が足らなかつた、焼けば何物も焼き盡すべき勢ひを以てし、焼かざれば一點の火もあけざるが宜しい、なまなか中途半端に煙

を立て、小策を弄したから無効だ、は、は、は、ところで今度は此方から尋ねますが、杉浦の娘、あれを全體、どうなさる心算です、もはや思ひ切つて捨てましたか、但し猶まだ御本人に思召ありますか、それが第一の先決問題だ」

折しも階下より茶を運び來りしお絹、梯子段より差上げし痣長の菓子も取次いで、二人の前に懇懃の會釋振を、じろくと井村三藏、

川徳は平氣に首肯いて、

「そこへ置けば宜い」

お絹の去りし後、ぬからぬ井村は聲を潜めて、

「や、なるほど、あれでは杉浦の娘も目に這入りませんな、は、は、は、川徳、逆寄に洒落のめして、

「お氣に入れば、取換へませうかな」

井村三藏、まだ一皮の下に一工夫ありて、もはや川徳を敵には取らねど、その川徳のため惚け交りに戀の講釋を聞かされただけでは承知せぬ男、

川徳また額に受けし疵の痕は消えても、いよ／＼世の中へ出直す首途の小手調べに、幸ひ我ま、生育の華族と一筋繩にかゝらぬ井村を相手として、面白い浮世狂言の一芝居を演じさせ、これを木戸錢なしに見物する料簡、

互に笑ひながら互に謀り合ひ、互に軽く洒落ながら互に深く考へて、雙方ともに今日は一つまづ相引の物別れ、杉浦の娘久子を謎の如き一個の懸案として、

「今日は兎も角、これで失敬しますが、どうです川田君、近々、どツかで夕飯かた／＼、ゆツくりと改めて話さうぢやありませんか、もはや當ツて碎けた以上、萬事うち解けた

友達となつて戴いてね、はゝゝゝ」

「や、どこへでも行きますが、無論、奢ツて下さるんでせうな、あらかじめ念を押して置かないと大變だ、加之も職工が華族様を逆様に奢ツちやア我國に於ける歴史上の破壊だ、その節おみやけも頂戴出来るでせうな、まだ一疋、家に口を開いて待ツてる奴が居ますからね、はツはツはツ」

「はゝゝゝ、恐ろしい職工さんだ」

「なアに淺ましい職工風情ですよ」

「しかし川田君、冗談は置いて、もう職工を止めたんでせう」

「入谷を去ると共に實は止めたんですがね、まだ外に何もせず、これといふ目的もなく、つまり浮世の宙に迷ツてるんだから寧ろ職工以下ですよ、もし威張れば前の何々大臣と

いふ格で前職工川田徳次郎だ、は、ムムム」

「どうも君の圓轉滑脱には叶はない、わるくいへば殆ど捉へどころがない」

「よくいへば取得がないンでせう」

雙方ともに笑ひながら、井村三藏を門口へ送り出せし川徳、我足下を見し目にお絹を振り返りて、

「女の足は小さいもんだな、つい自分の下駄が目ツからなかつたから、ちよいと借りたが、これで一丁も歩けば爪頭が曲ツて仕舞ふだらう、は、ムムム」

「あら、貴君、かまはず爪頭を、お入れなさらないからですよ、ほ、ムムム鼻緒が切れても宜う御坐いますワ」

黙ッて居れぬ徳長、すぐに口を出して、

「おい君、ぶつりと切ッてやるさ、實は切ッてほしいンだよ、ねエお絹さん、あ痛、た、た」

此奴また捻られた様子、これで今日は二度目の痛さ面白さ、まッ黒の瘦面を皺めながら、

「つまらない役廻りだ」

井村三藏を送り出せし川徳、また其ま、二階に音もなく聲もなく、静に腕を組んで何をか思案の階下には、戀に浮身のお絹と、例の調子づいた徳長、つまらぬ事に嬉しくて堪らず、馬鹿けたる事に面白くて堪らぬ人間、

「ねエ長さん、今、わたしの下駄、あれは、つい、うつかり知らずに履き違へたンでせうか、それとも、わざとでせうか」

「さア、どうだらうな」

「さアぢやありませんよ、ほんたうの事を言ッて下さいな」

「ほんたうの事は本人に聞かなくツちやア、わからない、しかし履いた事は全く履いたんだからな、おまけに鼻緒が弛むと悪いから足の先を爪立て、居たといふんだもの、よほど加減して履いたのさ、さう嬉しけりやア少しでも、あつたか味のある間に履き直して見れば宜かつたに、惜しい事をしたよ、は、は、は、もう冷めたらう」

「あら、まア酷い」

「何が酷いもんか、もし僕が間違ッて履いたとすりやア、それこそ大變だ、あらまア酷いぐらゐで濟まないね、いや急に減つたとか、こんな形が曲つたとか表が摺れ切れたとか、好きな事をいふだらうに、勝手なもんだよ、は、は、は」

「いゝえ、貴君なら構ひませんワ、は、は、は」

「うまく言ッてるよ、ちよいと下駄を履き違へて貰つただけで、かう夢中になるんだから今日の夕方、いよく先刻の約束通り三人で散歩に出たら、どうなるだらう、實は心配で堪らない、お絹さん、ふわくせすと、氣を確にしッかりして下さいよ、つい其處に三味線堀があるからね、おツこちられると大變だ、は、は、は」

「貴君さへ不意に突き飛ばさなければ、わたし大丈夫、落ちませんワ、もし萬一、落ちたツて、貴君の外に、どうかして下さる方が、ないとも限りませんからね、は、は、は」

「おい／＼お絹さん、さう急に、さう平氣に安心して、づう／＼しく出ちやア困るよ、はア、そろ／＼もう僕を退けもんにしかけたね、よろしい、そツちが其料簡なら、此方にも考へがある」

「おや、どんな考へですの」

「いはない、それを言ッて仕舞ッちやあ此方の種あかしで、ますく僕を用なしにするか
らね、はムム」

「あら、今のは冗談ですよ、まだ貴君に澤山お頼みがあるんですもの、あやまりますワ」
のそくと二階より降り来りし川徳、おもはず微笑を含みながら、

「また二人で、くだらない話しを始めてるね、お絹さん、何を謝罪るんだ、どういふ悪い
事をした」

お絹は俄に身を片寄せて、幽に小さい聲、

「それ御覽なさい」

痣長は例の細首を縮めて、まッ黒の額越、

「そろく君、お絹さん、この僕を入らない人間に扱ひ掛けて来たよ、はムム」

日夜相隣れぬ痣長とさへ、餘儀なき用の外は連れて歩いた事のない川徳、どうした拍子の
氣まぐれか、今日の夕方、お絹もろとも三人で散歩の約束、

今までは主人の婆アさん、なるべく遅かれと心に祈りしお絹、俄に其歸りの遅きを恨みて、
そツと痣長に向ひ、

「何故お婆さん、かう遅いでせうね、お寺まゐりなら、お寺まゐりだけで、さツさと早
く歸れば宜いものを、年寄のくせに、どツか外を廻ッてるんですよ、じれッたい事ねエ」

「なアに實は氣を利かして、わざと遅くなッてるんだらう、はムム」

「だッて、そろくもう日が暮れるぢやありませんか、もし夜にでもなッて、あまり遅く
なれば無効になりますもの、わたし今の間に、お爺さんと呼んで来ますワ、お爺さん
貴君方の来たのを幸ひ、あゝいふ人ですから好い氣になッて子息の方にはかり居るんで

すよ、憎らしい」

「や、ちよいと待った、婆アさん事に依ると氣を利かし過ぎて歸らないかも知れない、久しぶりに爺さんと一所に子息の方へ泊り込んで仕舞って、今夜お絹さんを此家で寝かす心算ぢやアないかね、やアやアやア、さうなると今度は此方が憎らしがったり自烈つたがられる役廻りだ、仕方なしに追ひ出されて三輪の白馬へでも轉け込むかね、は、は、お絹さん晝の留守番と夜の留守番と全體、どっちが宜いんですね、は、は、は」

「あら、また、そんな事」

「あら、また、うれしい事、ほ、は、は、これは誰かの名代笑ひ、は、は、は、これは拙者の笑ひ聲、忙がしいこった、男女兩方の使ひ分け、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、折しも婆アさん、ひよこりと歸り来りて、

「お絹さんや、大變に遅くなつて済みませんね、留守中、別に用もありませんでしたか、おや貴君お一人、何だか面白さうに笑つて居なさるよ、どんな嬉しい事が御坐いますの、あの川田さんは」

「二階に居ますがね、階下では今お絹さんに窘められてる最中で、おもしろ可笑しく笑つたんぢやアない實は苦しまぎれの泣き笑ひですよ、は、は、は」

「嘘ですよ、お婆さん、わたしこそ、さんざ玩弄にされてるんですの、上げたり下げたり、口惜しくつてなりませんワ」

さらりと刷けて氣輕の婆アさん、そのまゝ梯子段の口に立ちながら上を向いて、

「どうか川田さん、ちよいと降りて来て下さい、階下で喧嘩が出来ましたから、ほ、は、は、川徳また今日は案外の洒々落落々、笑ひながら靜に降りて、

「困ったもんですな、よろしい、これから二人とも外へ連れ出して、うんと叱つてやりませう」

さア志長といはれぬ先に戸外へ飛び出して、振り返りながら差覗けば、川徳の背後にお絹の赤い顔、

その風俗は書生とも見えず職人とも見えず、その容貌は友達でもなく兄弟でもない男二人に、これは猶更ら妹とも見えぬ美人が従うて、ぶら／＼と歩み行くを往來の人目に何と思ふやら、夕暮の路傍に神易の弓張提灯を掲げし賣卜者まで肩を繋めながら、いかにも判断のつかぬ顔色、

竹町を東に出でて北に向ひ、わざと下谷公園の雑沓を避けて三味線堀に添ひしが、いつしか先に立ちし川徳、お絹と志長を振り返りながら、

「ほしやく／＼内證で何を饒舌つてるんだい二人とも、しかし何處へ行かうかな、さて出て見ると散歩は案外、つまらないもんだよ、は／＼」

志長、まッ黒の細首を突き出して、

「實はね、お絹さん淺草か上野へ行きたいといふんだか、どうだらう、出た以上このまゝ歸れば猶、つまらないよ」

お絹は頻りに打消して、

「あら、わたし、さういひませんワ、こゝから淺草と上野へ、どっちが近いだらうと、只それだけの事を」

川徳、また歩みながら振り返りて、

「行くとすれば、遠くても近くても同じこつた、兎も角も足の向いた七軒町の電車通りへ

出よう、だが乗らないぞ、無論どこへ往つても奢れないぜ。てくく、歩きの草臥れ儲けだ、は、は、お絹さん、勞れたら何處でも都合の宜い途中から歸りなさい、おい志長、貴様も勝手にしろ、乃公は出た序だ、ちよいと三輪の白馬を尋ねてやらう」

ぶら／＼七軒町の電車通りへ出でし時、志長は俄に立縮みて面を皺めながら、

「困った困った、こりやア困った、急に堪らなくなつて来たが、この邊に共同便所はなし、さア大變だ、あの横町へでも這入つて見よう」

「まるで小兒だな、は、は、巡査に目ツかるな、早く何とかしろ、こゝで待つてるから」

「いや、そろ／＼歩いてくれ、すぐ後から追ツつくよ、やア堪らん堪らん」

首を縮め腰を屈めて、ちよ／＼と小走りに西町の横筋に駈け込みしが、實は我身を外して二人に思ふ事をいはせたい心、誰に遠慮もない宵闇を幸ひ手と手を繋いで歩かせたい

心

そのまゝ一散に遁け出すが如く、西町を縦横に走り廻りて、やう／＼歩を停めし向ふより思ひもよらぬ杉浦の下女、

はツと驚いて今度は全くの遁け腰、また駈け出さむとするを目早く見付けし敵の觸聲、

「おやツ、禿さん」

おや禿さんと呼ばれし志長、ぐツと癩に觸りし面を捻ぢて踏み止まり、

「何、禿さんだ、此女め、相變らず人を馬鹿にしやアがる、まだ無事に生きて居たのかい、厄介な肥ツてうだ、入谷に居た時の長さんとは違つてるぞ」

いかにも相變らぬ下女、

「あら、お氣に觸りましたの、では改めて長さん」

「ふざけるな」

「ほ、ほ、暫く逢はないンですもの、さう怒るもンぢやアありませんよ、時に只今、どちら」

「どこでも此方の勝手だ、わざ／＼厄病神に居處を知らす奴があるかい」

「厄病神、まア酷い事、しかし兩方とも實は口でいふほどね、お互に腹の立つ間柄でもないンですから、今までの事は水に流して、さッぱりと」

「いやだ、さッぱりよりも、まッぴら御免を蒙らう、用のない女に暇を潰されて堪るもんか」

「おや、ふしぎです事、近ごろ用のある女でも出来たンですか」

「あ、出来たよ、出来たとも、あら長さん、もし長さんと、この長さんでなくツちやア日

も夜も明けない女があるンだ、現に今その女と無理に別れて来たンだ、へ、へ、へこれから今夜また逢ッて話す事があるンだ、手前なんか掛ッて居れるかい、さよなら、あばよ」

さッさと其まゝ歩き出せば、また背後より小走りに急いで、

「ちよいと待ッて下さい、肝心な事を忘れましたワ、あの川田さん」

「あの川田も、この川田さんもあるもンか、川徳は一人だい」

「その一人に用があるンですよ」

「ぢやア乃公に用のない筈だ、は、は、は」

「まア、さういふもンぢやアありませんよ、ついでに何か用を拵へてあげますから」

迎も叶はぬ穂長、もはや振り返りもせず無言のまゝに急げば、やはり無言のまゝ何處まで

も離れず、これ幸ひに川徳の所在を見届けむと、立停れば立停り、動けば動いて、影の形に従ふが如し、

「お氣の毒ですが今夜中、この通りですよ、もし駈け出せば後から怒鳴りますよ、そろそろ行きませう、どうせ御注文の厄病神ですもの、ほ、ほ、ほ」

かくとも知らぬ七軒町の電車通りに川徳お絹の二人、惣長の駈け込みし西町の辻に向ひながら、今か今かと待てども来らず、あまりの遅きに舌鼓を鳴らして、

「ちよッ、困ッた奴だな、かう長い筈はないに、何をしてるんだらう、馬鹿に慌てるかと思へば、またこれだ」

「わたし、見て来ませう」

「なアに、わざわざ見に行かなくても宜い、もう少し待って居て、来なけりやア捨て置

くさ」

「だッて、どんな事があるかも知れませんワ」

はや日は落ちて夕暮に眞白の襟首、猶更ら際立ちて小走りに走せ行く後姿を、おもはず打ち成りし川徳、はてな、もしやと小首を傾けしが、やがて急ぎ歩に歸り来りしお絹、眉を顰めて差覗くが如く見上げながら、

「どうしたんでせう、あの辻を曲ッて、右の横町も左の方も探しましたが、影も見えませんの、此方へ出るの間違ッて、向ふへ出たのではないでせうかね」

「いくら彼奴でも、まさか、さうは狼狽へまいよ、は、は、は仕方ない、捨て、行かう、しかし二人で何處といふ的もないね」

「散歩ですもの、的はありませんワ、ほ、ほ、ほ」

「さういへば、さうだが、散歩でも方角ぐるる定めないと、たゞ草臥れたって、つまらない、お絹さんは、もう歸るんだらう、上野邊まで送らうかね」

「わたし、久しく、銀座邊の夜を見ませンの、こゝから銀座までは大變ですから、電車で京橋まで往って、ぶら／＼歩きませうか」

「一文なしだよ、はゝゝゝ」

「あら、わたし持つてますよ」

「遅くなるだらう」

「遅くなつても、かまひませんワ」

「銀座かね」

「おいやなら、外へ、どこでも」

「何時だらう」

「まだ貴君、今、暮れたばかりですもの、それに今夜は、も少しで、お月さまが出ますよ、たしか十三日ごろでせう」

「なるほど、月夜だな」

「もし、お邪魔になれば途中で、すぐ歸りますから、いっそ吾妻橋を渡つて、向島の方へまゐりませうか、うす闇く土堤の葉櫻が繁つて、きら／＼と月が水に流れて、さぞ好い景色でせうね、わたし、花の外に、行つた事ありませんワ」

「それほど委しく知つて居りやア行くに及ばない、行つた證據だ、はゝゝゝ」

「あら、さうでなくつて、わたし、人に聞いたんですよ」

「や、向島、よからう、お絹さん電車賃あるね、吾妻橋まで乗るとして」

あるともいはず、お絹そのまゝ歩み出せば、川徳また身を運び出して、電車の停留場まで、折しも片側の屋根ますく黒く、月の出しほの空は白し、

川徳お絹の二人は向島へ行きしが、細く瘦せこけたる男の影法師と、まん圓に肥りし女の影と、凡そ前後に一間ほどを隔て、相離れず、絲に繋がれしが如く稻荷町の横道を歩みながら、動けば動き止れば止りて、

「此女め、のこゝまだ附いて來やアがるな、よし、かうなれば今夜中の根くらべだ、さア何處までゝも來い」

「行きますとも、此方も意地ですワ、しかし考へて見ると、お互に草臥れるばかりで、つまらないぢやありませんか、もう好い加減に降参なさいよ」

「降参しろ、こん畜生、相變らず人を馬鹿にしやアがる」

「だつて、わたしには逆も勝てませんよ、わたしは女で五黄の寅ですから、どんな男でも覗はれた以上、もう無効、助かりませんからね、この邊で往生した方が結局お爲でせう」

「な、何を吐しやアがる、虎でも熊でも恐れるか、矢でも鐵砲でも持つて來い」

「ほゝゝゝわたしが虎で、そつちは蟹ですよ」

「蟹だ」

「蟹ですワ、ごそく歩かずに早く自分の穴へ這入りなさいよ、こゝに棲んでるといふ穴さへ分れば、それで用はないんですからね」

「どツこい、その術を食ふか、この長さは入谷に居た時の職工ぢやアないぞ、當分お遊びで一夜や二夜、どこを彷徨いても明日の時間に差支のない御身分だ、遅くなつて叩き出される奉公人と違つてるからな、まア其方は首になる覺悟で附いて來い、はゝゝゝ」

「お生憎さま、わたしも二三日、ちよいと都合上お暇を頂いて宿へ下ッてるんですよ、しかし此まゝお暇になりつきりではありませんからね安心して下さい、また直ぐ元の通り、お屋敷へ歸りますの、ほゝゝ、雙方お互に何といふ間の宜いこッてせう、まるで約束して出逢ッたやうですワ、よくゝ縁が深いんですね、さアお歩きなさいよ、幸ひ月夜で、おまけに此月は曉方までありますから」

志長、そろゝ凹垂れ氣味、川徳お絹の二人を今夜の月に取持ちしが、とんでもない此女に出逢うて免るゝ道なく、もはや最後の一策として三輪邊を走り廻りし上、隙を覗いて白馬の宿へ遁け込む考へ、俄に阪本町の通りへ急ぎ足、

「さア附いて来い」

また川徳お絹は、かういふ筈でない二人、どこへ行く的もない二人、此まゝ別れず散歩す

るとなれば、上野か、淺草か、聊か遠けれど銀座かと笑ひながら、誘ふともなく誘はるゝともなく、幸ひ眼前を奔る電車に乗りて厩橋を渡り、また吾妻橋まで乗り替へて、枕橋より向島の土堤を歩みし頃は、茂れる葉櫻の上に皎々たる十三夜の月、隅田川の水は常よりも廣く見えて眞白に銀を展べたる如く、ちらゝと今戸橋場の岸に碎けて流るゝ灯影、待乳山は聖天の森を空に捧けて、ほッと薄墨の刷毛繪に似たり、

「なるほど、かうして見たところは江戸以來の名所だ、晝は四方に煙突が立ッたり赤煉瓦の工場が並んだり土堤は引ッきりなしの荷車で砂塵の俗地になッて仕舞ッたが、やはり夜は昔のまゝの向島だ、しッとりと静な工合、たまらないね」

「全くですよ、近來の向島は猶更ら、夜に限りですワ」

「しかし夜も今時分が宜い、あまり更け過ぎると凄味を帯びて来て、こゝは情死に持ッて

「來いの本場だからね、は、は、は」

「あら、いやだ事、氣味の悪い」

「情死よりも何よりも冗談は置いて、お絹さん、腹が減つたらうな、つい近くを歩く考へで夕飯を食はずに來たから、は、は、は、こゝは牛の御前だ、そろくもう歸らうかね」

「わたし、どうしたのか、妙に胸が一ぱいで、少しも、お腹が空きませんワ、貴君こそ御迷惑でしたね、こんなところへ連れて來られて、もし何なら、わたし少々、持つてるますの、どツか、この邊に目立たない、料理屋でも」

「なアに此方は平氣だ、念の入った貧乏暮らして、空腹には馴れてるよ、は、は、は、しかし遅くなるからね」

「貴君さへ、かまはなければ、わたし、遅くなつたつて、折角こゝまで來たんですもの、

あのウ白髻へは、どのくらゐあるでせう」

「白髻までは、ちよいと遠いよ、歩けるかね」

「歩けますとも、どこまで、も歩きますワ」

「は、は、は、さう無理に歩いた後で、背負してくれちやア困る、はッはッはッ」

お絹、無言のまゝ、四邊に人なき月を浴びて三四間も歩みし後、俄に立停りて、そつと倚り添ひながら思ひ切りし小聲、

「どうせ、わたしは、貴君の、お困りもんですワねエ、なぜ、わたし、かう貴君を、困らせるんでせう」

流石の川徳、押し詰められしが如く、棒立のまゝ、腕を組んで月を仰ぎながら、
「お月さま、この二人を何と思つてるかなア」

夜の十一時過ぎ、ぶら／＼と月を浴びて竹町の辻まで歸り來りし川徳、ひよこ／＼と瘦せこけたる影法師の此方へ近づくと、暫し待ち受けて見れば、果して志長、

「おい、どうした」

「やア、君も今か」

「やアもないもんだ此奴、たのみもしないに、よけいな事をするない、あゝいふ事は乃公なにかにする藝ぢやアないぞ、つまらない奴だ」

「あゝ氣を利かして叱られちやア少々、あはないね、あれで實は君、よほど考へた藝だぜ、譽められても宜い筈だ」

「貴様の譽められるのは藝のない茫然した時だ、をかしく變に考へたり業をしたりする時

は、きつと傘屋の小僧で、骨を折つて叱られるに極つてるよ、はゝゝゝしかし全體まア今頃まで用もないに、まご／＼何處を彷徨いてたんだい」

「ものすきに今頃まで、どこを彷徨くもンかね、いやはや、とんだ目に逢つたよ、あれから今まで追ひ廻されの災難續きで、のべつ幕なしに逃げ歩いたが、草臥れた草臥れた、がッかりして仕舞つた、これで君に文句をいはれりやア世話なしだ」

「なぜ、さう泣言をいふんだい、どんな酷い目に逢つたんだ」

「どうも、かうも、お話しにならない馬鹿を見たよ、その馬鹿も知らない奴に擲られたやうな一通りの馬鹿さ加減と違つて、ひよつくり喰はしたのが例の半狂氣、杉浦の下女だらう、驚いたね、まさか彼奴、あんなところで不意に湧いて出るたア思はないからなア、墓原で化物に出られたよりも驚いたよ」

「や、さうかい、は、は、は」

「笑ひこつちやアないぜ君、現在、僕の身にもなつてくれ、あれ以来、彼奴は一生懸命に君の居所を探してゐるんだらう、その一生懸命に運わるく、ぶつかつたから堪らない、まるで親の仇敵でも見付けたやうな勢ひだ、どう振り拂つても追ひ退けても根氣よく附いて来やアがる、仕舞には自暴になつて今夜中、離れないと吐すんだ」

「そこで、どうした」

「仕方がない、こゝへ歸つて来ちやア大變だと思つたからね、仕方なく三輪の方へ歩き出して、さア来いといふや否、ぐる／＼走り廻つた上で、うまく隙を覘つて白馬の家へ飛び込んだよ、は、は、は、此方も草臥れたが、あの肥つてう女、よほど參つたらしかつた、二三日は身體中、ぐたく／＼になつたらう、時に君、お絹さん、どうしたね、どこへ往つ

て、どこで別れた」

川徳、そのまゝ急に歩き出して、

「歸つて、ゆつくり話さう」

もし一戸を構へて門口に表札を出せば、吉岡定勝の四字、ちよいと馬鹿にされぬ姓名なれど、現在の本人は日給四十錢の職工より出世の覺束ない男、のツペりの白馬と呼ばれて、入谷を立退きし以來、この馬ます／＼川徳の轡も志長の手綱もない素放しの裸馬となり、三輪の糞しめ屋に同じやうな奴と一蓮託生の五人暮らし、

その四人は揃つて夜業の今朝まだ歸らず、たゞ一人の起きぬけに、ひよつくり尋ね来りしは杉浦の下女、加之も手土産に案外の大きい菓子折持參、別に一封の金子これは直に差出

さねど、わざと傍に置いての笑顔は、この白馬の内兜を見ぬいた懸賞附、

「まア貴君、こゝに居なさるとは燈臺の下闇しで、少しも知りませんでしたワ、をりくく喧嘩しながらも現在あゝお心易くして居たのに一言の挨拶もなく、だしぬけに引ッ越すなんて、あんまり情がなさ過ぎるぢやありませんか、もし萬一、わたしが色女なら、どうなさるの、たゞは置きませんよ、ほゝゝゝ」

川徳に睨まれず惣長に邪魔しられずば、この白馬一疋、自由自在の下女、まづ餌を以て釣り始めの藝當、

「あのウ、失禮ですが、これは、お引ッ越の兎も角お見舞として、お嬢様から、遅くなつたのは、知らして下さらないからですよ」

のッペりの白馬、ますく面を長く目鼻を伸ばしながら、

「お氣の毒だなア、わざくこんなものを、しかし僕一人で貰へないね」

「無論、お三人へ差上げるんですよ」

「ところが、川徳も惣長も實は、こゝに居ないんだから困る」

「そりやア知ッて居ますよ、現に前夜、あの禿さんに逢ひましたの、すると貴君、わたしとは例の仲悪でせう、だから、わざと意地になつて、さんざ騙し歩いて、うまく振りまいた心算で、こゝへ這入つたところを見届けましたからね、それで今朝、お尋ねしたんですよ、あのお二人は、何處ですの」

前夜、惣長に飛び込まれて委細を聞きし白馬、聊か考へ込んで腕を組みながら、

「實は、まだ往つた事はないんで、淺草邊とは聞いているが、しツかり分らない」

「嘘お吐きなさい、分らない事がありますか、往つた事はなくても居所番地は、ちやんと

分つてゐるでせう、ではね、かうしませう、直接に貴君から聞いたといへば都合の悪い事もあるでせうから、ちよいと町名だけ内々で教へて下さい、わたし知らない顔で、探し當てますからね、何も探し出して、どうするといふンぢやアないンですが、これまでの行掛り上、お嬢様へ濟まない事になりますよ、もはや今日では過ぎた事ですが、あのまま行先も知らないでは、ほゝゝ、決して貴君に御迷惑、かけませンワ、實は貴君に向いて貰はうと思つて、こゝに、この通り、お車代まで持つて來ましたの、これは此まゝ差上げて置きますから是非、教へて下さい、ね、さう野暮な貴君でもないにさ、ほゝほゝ」

今朝は常よりも早く、やうく東雲の横雲に薄赤く色づき初めて、夜露まだ濕り勝の曉方

に二階の雨戸を引き開けし川徳、半窓に倚りかゝりて空を打仰ぎ、さも心地よけに大息を吐き續けしが、振り返れば徳長の寝顔、今に始めぬ貧弱の瘦面なれど何とやら憎氣のない奴、にゆつと枯木の如き兩手を伸ばして枕を外し、むにやくと理由の分らぬ寢言まじりに無心の體、我を行末の力と頼みて人生この安樂を得るかと思へば、哀れ深く、もし此奴このまゝの面で我に離れぬ女とすれば俄に呵しく、ぶつと思はず吹き出しながら、

「おい起きろ、起きろ、起きないか」

「二三度も呼び起されて、やうく目を覺せし寢ほけ面、きよろく四邊を見廻して、

「まだ早いぢやないか、馬鹿に今朝ア早く起きたね、前夜あゝいふ一件で、あゝ遅くまで

草臥れた今朝この早起は少々、ねむいな、どツか出るのかね」

「文句いはずに黙つて起きろ」

「起きるよ、起きるよ」

いちく絶えず口に文句をいへど、事實は川徳に絶対服従の志長、ごそくと這ひ出して、夜具を片寄せ、そのまゝ階下へ行かむとするを、

「おい／＼何をしに行く」

「兎も角も顔を洗ひに」

「まだ階下は寝てるよ、第一そんな顔、いつ洗ったって宜いちやアないか、それよりも此窓から面を出して見ろ、朝の空気で頭腦の洗濯が出来ろぞ、しかし頭腦も實は洗濯甲斐のない頭腦だからア、は／＼」

口と反對に心の優しい川徳、聊か我身を退けて窓下の座を譲れば、かう云はれても腹の立たぬ志長、にや／＼笑ひながら、

「なるほど、まだ往來に人通りもなく屋根に露があつて、そよ／＼と朝風の吹いて来る工合、好い氣持だなア、頭腦の洗濯は出来なくツても、はつきりと目が覺めるから目薬ぐらゐの效能はあるね、は／＼」

「うまい目薬は巧い、生意氣な事をいふよりは、その邊が貴様の最も面白い價値のあるところだ、は／＼時に志長、こゝへ来て彼是、もう半月に近くなるな」

「さうだよ、今日で十四日目だ」

「その間、たゞ茫然として居たでもないが、いよ／＼今日から乃公が乗り出すぞ」

「世の中へ乗り出すのさ、凡そ方角も定めたよ、こゝ三四日の後には、何とか極るだらう、今日の世の中この乃公を、初めての、お目見えとして、どういふ工合に扱ってくれ

るかな、どんなところに使ッてくれるかな、は、は、は、

向島の月を浴びてお絹と散歩せし川徳、その翌朝は常よりも早く志長を呼び起し、笑ひながら洒落まじりに前夜の事を語るかと思へば、いよく今日を首途に世の中へ乗り出すぞと、案外の眞面目なる一言を残して立出ですが、そのまゝ晝を過ぎ夕暮になりても歸らず、夜に入りて後、届きし一枚の葉書を見れば、志長に宛て、鉛筆の走り書、都合ありて三四日は歸宅いたさず候へども心配無用、おとなしく暢氣に留守を頼み候、もし其間に來る人あらば其人にも此よし通せられたく候 途中より川徳志長、この葉書を眼前に置いて、頻りに小首を傾け腕を組み始めしが、さて傾けし小首より何の妙案も出でず、折角の腕組みも端書の文面通り三四日を待つ外なく、たゞ來る人を

お絹の事と推察するだけの智慧、

されど三四日の間、何故に歸らざるかとの不審、心配無用といへど何處で食ひ何處で寝るかとの心配、第一は川徳の懷中に一圓あるかなしかを知れば、猶更ら差圖通りの暢氣で居られぬ志長、さりとして飛ンでも跳ねても工夫のない苦しませ、ますく、落著いては居れず、兎も角も神田へ行かむと立出でし門口、お絹と出合頭に例の頓狂聲、

「お絹さん大變だ大變だ、今、行かうと思ッてるどころだ、川徳が居なくなつたよ」

お絹は志長を力まかせに戸内へ押し戻して、

「おや、さうですか、どツか外に好いところがあるンでせうよ、ほ、ほ、ほ」

「冗談でないよ、ほんたうだよ、全くだよ、この通り端書が來たんだ、僕へ宛て、途中から、ね、そら、大山長吉どの、川徳より」

たゞ表の宛名と途中よりとせる川徳の二字に、はッと始めて顔色を變へしお絹、おもはず
志長の胸倉に獅噛み付けば、

「痛い、痛い、さう爪を立てちやア困る」

「だつて何故、そんな端書を受取つたんですよウ」

「受取つたんぢやアない來たんだよ來たんだよ、三四日で歸るよ、三四日と書いてあるよ」
裏の文句を見せられて、やうく手を放せしが、それを最初に見せられざりしが、また口
惜しく腹立たしく、

「どうして始めに、さう言つて下さらないの、貴君、わたしに何にか、恨みがあるんでせ
う」

「ば、馬鹿な事を、は、は、は、恨みどころか相談に行かうと思つて出かけるくらゐだよ」

「でも、だしぬけに、わたしの顔を見て、大變だ大變だ居なくなつたと喝したちやありま
せんか、わたし喝される覺えない筈ですが」

「困るなア、お絹さん、川徳の事になると、いやに氣が廻つて困るよ、うか／＼すると今
度は目を舞はされて困る事があるだらう、は、は、は」

「笑つて下さい、たんと笑つて下さい、さぞ阿しいで御坐いませう」

「御免なさい、ちよいと御免下さいまし」

折しも主人の婆さん不在、入口より次の茶の間に坐せし志長、ふと首を伸ばして見れば杉
浦の下女、や、畜生、いよく嗅ぎ付けて來やアがったと俄に居直りて眞正面に向ひ、わ
ざと恍惚の顔を突き出しながら、

「どちらからです、どなたです、どういふ御用です、ついに見た事のない女中さんです
が」

流石の下女も聊か道具外れを打たれし心地、されど此まゝ引き退る女でなく、づうくし
く平氣に構へて、

「こちちに川田さんといふ方、在らッしやる筈ですが、只今お在宅ですか、お目にかゝれ
ば分りますから取付いで下さい、御苦勞さま」

「居りませんよ、お生憎さま、川田といふ人間、居ませんよ、お間違ひでせう、考へ違ひ
でせう、何かの間違ひでせう」

「いゝえ、在らッしやる筈です、たしかに聞いて、まゐりましたからね」
「どこの誰に聞いたとしても、居らない人間の居る筈がない、疑はしくば上ッて見ても宜

しいが、しかし家探しされるほどの悪い事もなしね、それとも萬一もし強情に居ると思
へば、思ひの晴れるまで一日この門口で立番したら、どうですな、ちよいと乙ですぜ、
はゝゝゝ」

此奴こゝに頑張ッて居ては迎も無効と諦めし下女、もはや例の無遠慮に大聲を出して、自
然と二階の川徳を引き降す覺悟、急に高く癡走ッて、

「お前さん、どういふ理由で、さう邪魔するんですの、わたしはね、お前さんのやうな人
に暇を潰すため来たんぢやアないんですよ、是非とも川田さんに逢はなければならぬ
用があつて、わざわざ忙しい中を伺ひましたのさ、加之も川田さんは現在この二階を借
りて居なさるといふ事、たしかに見届けて来た以上、どうあつても川田さんに御目にか
かりますワ、もし御不在なら、お歸りまで待つて居ますワ、こゝの飼犬ぢやアあるまい

じ、門口に番して居れますか、失禮な人だよ、この痣さんは

「な、何だ、この痣さんとは何だ」

「何だッて痣があるから痣さんで宜いぢやアありませんか痣がなくて痣さんといへは間違ッてますが、間違ひのない痣を痣といふのが何故、お氣に觸りますの、痣ちやん」

「ちやんだア」

「さんより、ちやんの方が可愛らしく聞えますよ、まア可愛い痣ちやんだ事、ほ、ほ、」
障子の蔭に身を潜めしお絹、さも口惜しげに顔を差出しながら、思ひきッて大膽なる挨拶

「川田さん居る事は居りますが當分、歸りませんよ、ねエ長さん、あ、いふ用ですから早くて一二年は掛るでせうね」

痣長ばかりと思ひの外、思ひもよらぬ障子の影よりお絹の顔、ひよッこりと現はれて、加

之も案外の落著き振に身を捻りながら、川田さんは早くて一年ばかり歸りませんよ、この

一言を眞正面に浴せられし杉浦の下女、だしぬけの不意に最後の止めを刺されし顔色、

まさかと思ひしに、そのお絹こゝにありて我家の如く、よもやと思ひしに、そのお絹こゝにありて今の一言、もはや川徳は敵に取られしものと、諦めしだけに猶更らの自暴半分、

づうくしい元來の本性ますく、無遠慮に發揮して、わざと冷かなる微笑を浮べ、

「おや、お絹さん、こゝに居なされるの、少しも知りませんでしたワ、わたしは只、この痣ちやんと川徳さんと二人つきりだと思ッてましたよ、ほ、ほ、川徳さん一年も歸らない

とすれば、もう用も脈もないんですから、このまゝ歸りますが、實は川徳さんも案外つまらない人でしたね、その日暮しの職工を止めると、すぐ何處かへ一年の餘も出稼ぎしなければならぬんですか、まアお氣の毒です事、お絹さんも其間、ほんやり待ッて

居ても仕方がないでせうから、御奉公なすつては、どうですの、幸ひ、わたしのお屋敷で、まだ一人ぐらゐる小間使が入りますよ、お馴染甲斐に、お世話しませうか」

がらりと俄に今までの言葉を變へて、この下女の口より川徳々々といはるゝだけでも口惜しくて堪らず、我を忘れて居坐を進めしお絹、花一輪の風に狂ふが如し、

「用がなければ早く歸つて下さい、こゝはね、わたしの家ですよ、はい、わたしの家ですからね、用のない人は一時も置かれませぬ、また御深切にいうて下さいますが、お前さんと違つて、わたしは人様に奉公しなくつても食べたり著たりするだけには差支へのない、安心な身體ですの、もし奉公するやうな事があれば、わざわざ外へ出ませぬよ、ここで此まゝ生涯、川田さんに使はれる覺悟ですからね、ほゝゝゝ川田さんも使つて下さるんですよ、その日暮しの職工でも出稼ぎでも、わたしから見れば立派な人、どこに一

點の不足もない人、お金ばかりで男の器量とは、いへませぬよ、ダイヤモンドで光つたりするだけで、女ともいへますまい、ほゝゝゝ人は見かけの賣物でも飾り物でもないのですからねエ、ほゝゝゝ」

お絹としては一世代の大氣焔、畫がける如き美顔に何とやら凄味を帯びて、いきくと張り切る目は、珠玉を照り返すに似たり、

夜に入りて障子の影法師二個、お絹と志長、

「わたし、ほんたうに今日ほど口惜しい腹の立つた事はありませんでしたワ、あんな女の口から、川徳々々なんて、おまけに何處へ出稼ぎしたの、わたしに奉公しろの世話してやるのと、ま何といふ酷い事をいふんでせう、あまり腹が立って、ぶるゝ身體中が震

ひましたワ」

「しかしね、今日こそ流石の彼女も、ぎやふんと參つたよ、向ふの考へちやア首尾よく押し當てた料簡で、まさか、お絹さんが此家に居るとは思はなかつたからね、加之も不意に顔を出して、自分の家のやうに澄まし込んで居たから彼女、猶更ら面食つて驚いたらしい、そこで自暴になりやアがツたのさ、もう無効と諦めて、あゝ捨鉢に圖太い事を吐したのさ、此方のためには好い幕切れだった、はゝゝゝ癩に觸るが、これで萬事、さつぱりとして仕舞つた、いくら何でも二度と再び來られまいよ、かうなると、もはや此方の脈はなし、さんざ忠義ぶつた杉浦の娘には今更ら申譯がなし、中に立つ身の彼奴、いよく骨折損の草臥れ儲けで、叩き出されるか遁け出すかの二途が最後の藝だ、いろいろな業をした結句の果、つまらない藝當に終りやアがツたよ、はゝゝゝ」

「さう考へると、また氣の毒のやうな心持にもなりますねエ、わたしを嘸、恨んでるでせうよ、わたしに恨まれる筈はなくつても、自分の身が立たなくなるんですから、どんなにか憎いでせう」

「いくら彼奴に恨まれても憎まれても宜いさ、一方で可愛がられるからなア、はゝゝゝ」

「あら、また長さん、わたしを戲弄つてさ、ほゝゝゝしかし川田さん、端書の通り全く三四日で、歸るでせうか、その間、どこに、どうして居なさるんでせうね」

「さア、それが分れば、すぐ今からでも、出掛けるが、分らないから三四日の後を待つよりの外に、仕方がないね」

「仕方がないツて、さう仕方なくツては、困るぢやありませんか何とか仕方のあるやうにして下さいな」

「そりやア無理だよ、どう焦ったって仕方のないものは仕方がないに極ってるさ」

「仕方ないに極めて仕舞っては、なほ仕方ないぢやありませんか、かうなると長さは意地になつて、悪い方にばかり極めるンですわねエ」

「やアやア、そろく始まつて来たよ、外の事には抜目のない恰憚な、お絹さんだがなア、どういふもんか此一件になると、ふしぎに、わからない、は、ムム」

「どうせ、わたし馬鹿ですワ、この上この馬鹿を自烈さすと、氣狂になりますよ、いッそ、わたし何も斯も忘れて仕舞って氣狂になつた方が樂かと思ひますワ、氣狂は自分の氣狂になつた事を知らないでせう、馬鹿は馬鹿なりで馬鹿相應に氣を揉んで、いろんな心配しますからねエ」

端書の文面、三四日の後には必ず歸るべしといふ、その三日目の夕方、ぶらくと上野の廣小路を歩みし志長、交叉點の電車に遮られて暫し立往生の背後より、

「おい志長」

はッと驚いて振り返れば、どこの紳士かと思ひの外、新しき薄茶の中折帽に羽織袴の川徳、打ッて變りし風俗、俄に牙えし男振、加之も自用車の上より見下して満面の微笑、

「近々に歸るぞ、待ッてろ」

呆れし志長、あまりの案外に聲も出さず、たゞ啞の如く兩手を宙に目を剥き出すや否、すつと左右の電車は摺れ違つて、その間を駈けぬけし俾は後押の章駄天走り、車上より振り返りし川徳、また莞爾と笑つて首肯しが、もはや堪らぬ志長、始めて自己の走る事に氣が付き、俄に尻をからけて蚊の脛を現はしながら、飛ぶが如くに一生懸命

「おうい、おうい、そゝその俵ア
頻りに聲をあけて一町あまりも後を追ひしが、車夫は前後に二人、俵は宙に迂るが如く、
蚊の脛二本、逆も及ばず、次第に遠ざかりて向ふの辻を右に折れ、その辻まで走せ行きし
徳長、首を捻れば既に影なし、
南無三寶とは、かういふ時の言葉かと、徳長その辻に茫然と立ちながら、おもはず瘦腕を
組んでの一思案、
わづか今日で三日目に現在あの變りし風俗、帽子だけさへ新調の金なきに、りうとせし羽
織袴、どうして拵へしか、豫てより人しれぬ用意ありしか、加之も後押付の自用車が第一
の不審、近々に歸るといへば、明日の四日目まだ少しは延びる筈、猶更何とか談話のある
べき筈を、その三言四言の時間さへ惜みて、いかなる大切の急用に飛び廻るか、ますま

す徳長の頭腦に解し難き川徳の激變、

こりや、かうして居られぬと思ひしが、儲どうにもならぬ徳長、されど例の狼狽へた性分
じつとしては居られず、今更ら急いても慌てゝも何の效なく、ゆるく歩いても同じ事な
がら、また俄に走り出して神田の方角に向ひしが、また俄に踵を返して兎も角も竹町の我
家へ一散走り、途中三四人に突き當りて怒鳴られながら、
「それどころかい、川徳が大變だ」

おもはぬ不意に川徳と出逢ひ、後押の俵を夢中に追ッかけて、また竹町まで夢中に走せ歸
りし徳長、始めて我に返れば、疲れし五體の遣場もなし、
兩手を頭の臺に結んで枕とし兩脚を綾に組んで天井を仰ぎながら、水際を離れし魚の如く、

あぶく口を尖らして息を吹きしが、わづか三日目の今日、どうしても腑に落ちぬ川徳の激變、

もし悪い奴とすれば、盗賊でもするか詐欺でも働く外、あなる筈なく、もし馬鹿運の向いて来たものとすれば、不意に紙幣の束でも拾ふ外、あなる筈なしと思へど、惣長の目より見たる川徳は、さらりとして、慾のない男、からりとして暗いところのない男、きびきびとして小細工のない男、口に似合はぬ優しい男、心の底に頼母しい男、あくまで男らしき男、その川徳が現在あなるには實際あなるだけの事あるに相違なく、やはり豪い男といふの外なし、

されど惣長の頭脳には、その豪い理由が分らず、その豪さ加減が知れず、まるで雲を掴むが如く、夢を見た如く、たゞ茫とせる不思議に眉を顰め、迎も及ばぬ思案に胸を惱め、ます／＼考へに迷うて、迷へば猶更ら寝ても居られぬ階下に、お絹の來りし聲、

「お婆さん、今日は」

くるりと起きて、ごそくと這ひ出せし惣長、二階の降口より瘦ッ首を下けて、

「お絹さん大變だ、大變だ大變だ」

惣長の大變には馴れしお絹、梯子段の下より微笑を含みて仰きながら、

「また長さんの大變ですか、ほ、ほ、ほ」

「平生の大變とは大變が違ッてるよ、ほんたうの大變だ、全くの大變だ、兎も角も上ツたり上ツたり、さア大變だ」

「ちよいと今、お婆さんに談話があるんですからね、それが済んだ後で聞きますせう、うツかり慌て、長さんの大變を聞くと、それこそ後で此方の大變ですワ、ほ、ほ、ほ」

「さう僕の大變を馬鹿にするもんぢやアない、今日の大變は容易ならん大變だ、實はね、逢ったよ逢ったよ、先刻、川徳に」

お絹、おもはず棒立の如くなりて、じつと志長の顔を見上げながら、

「ほんたうですか」

「嘘をいふもんかね、加之も驚いたよ、わづか今日で三日目だらう、それが、どうして急に、あゝなつたか、五つ紋の羽織袴で後押付の自用車、まるで人間が變つて居たよ」

お絹は其まゝ無言に梯子段を上りしが、あまりの案外に氣を取られて脚下を踏み外し、どつと五六段目より落ちし哀れさに、志長は我を忘れての大聲、

「やア大變だ」

落ちしお絹、落ちしまゝの身動きもせず、顔を皺めて痛みを忍びながら、べたりと其處に

坐して、かけ降りし志長に向ひ、

「どこで、逢ったんですよウ」

お絹は痛みに堪へぬ顔を皺めながら、また其まゝ二階へ昇り行けば、志長も續いて後より這ひ上りながら、

「驚いたよ、はつとしたね、五つ六つ上つたかと思へば、急に下の方へ下り出して」

眞白の足首を薄赤く擦り剥きしお絹、おもはず眉を蹙めて恨めしげに志長を振り返り、

「上の方へ下りますかね」

「はゝゝゝしかし野郎なら突ッ拍子もなく不様に引ッくり返るところを、段づゝ順々と

温順しく落ちて往つて、べたりと行儀よく坐つた工合、あゝいふ器用な藝は女に限る、

はゝゝゝ男と違つて落ちっぷりまで優しいもんだ、始めて感心したよ」

つまらない、かういふ事に感心されて、平常ならば物も言はぬ筈なれど、たゞ川徳の事を聞きたさに怒りも得せず、片手に片足を持ち添へながら小膝を進めて、

「わづか三日の間に、どうして川田さん、さう變つたんでせう、悪い方に變つたのと違つたにしても、あんまり變りやうが早いぢやありませんか、それだけ猶更ら氣になつて、わたし心配ですワ、どこの誰が川田さんを、さういふ立派な風俗にしたんでせう、たとひ、お金があつても自分で拵へるには、逆も二日や三日で出来ませんよ、袴なんか、直ぐに買へても、五つ紋の羽織は、さう急に染められる筈はなし、第一、どういふ紋でしたの」

「さア、どういふ紋だつたかな、そこまでは氣が付かないよ、後押しの手で、だしぬけに背後から、おい志長といふや否、すつと驅けぬけて走り出したんだ」

「なぜ長さん、その時、黙つて楫棒に取摺まらないんですよウ」

「摺まるにも摺まらないにも、まて暫しの間もなく驅け出したから、すぐ後を追つて走つたがね、無効だ、半町あまりで見失つて仕舞つた」

「まア川田さんも、酷いワ、どうしてでせう、さういふ人では、ないんですがねエ」

折しも階下より婆さん、梯子段を昇り来て一封の書状を差し出ししながら、

「今ね、どツかの抱へ車夫らしいのが、これを持って來ましたよ」

表は大山長吉の宛名、裏は川徳の二字、急いで封を切れば、例の走り書、

用事の行掛り上、なほ一週間ばかり歸らざるべし、をりく来る人と下の婆さんと三人で、好きなものを食ふ奢り料として三十圓封入、こちらの心配は一切無用、

殆ど往來の絶え間なき神田の錦町も、はや既に夜の一時を過ぎ、そろ／＼二時に近き頃となれば、ふけわたる世間ますます陰に沈み、二百萬の大都會、ひっそりとして人なきが如し、

父も母も弟も安らかに前後を知らず寝入りしが、その隣室に同じ血肉を分けし身を横たへ目を閉ぢながら、寝ても寝られぬお絹、いかに人しれぬ心を掻き亂されてか、

天井に吊り上げし十燭の電燈、あたり隈なく輝いて、四疊半の一室に臥したる寝顔を照らせば、天生の白き色ますます／＼冴えて白蟻を磨ける如く、青みが／＼りし生え際より次第に黒き髪の毛いよく／＼黒く艶を含みて濡れたる漆の如く、世俗に三日月形といへど、ほつと聊か太く短く作らぬ眉に猶更ら卑しからぬ自然美を添へて、閉ぢし時は細く長く糸を引けるが如き目尻、ぱらりと開きし時は張り切るが如き目元、ふつくりと滑かなる頬の邊り、窪

み加減に締れる口の邊り、名畫も難しとせる頤の曲線に豊なる肉を包み、いつしか夜著の襟を掻き下けて柔かき胸を乳際まで現はしながら、をり／＼敷蒲團の外に遣る瀬なき手を抛け出せるは、いかにも苦しげの我身を持って餘せる風情、

この美人、この年頃、この終夜を人しれぬ物思ひに寝かしもせず、これを此まゝこの一室に捨て置くは、あまりに無残なる戀の神よ、いつまで悩まして誰に添はせむとか、

されど哀れに弱きお絹、この無慘なる神を恨みも得せず、たゞその神様を心の底に祈りて、思へば思ふほど猶更ら思ふ事のまゝならぬ苦しさに、睡らむとして目を閉づれば、電燈の光りだけは闇けれど、あり／＼と思ふ人の姿のみ現はれて、いよく寝られぬ夜の静に更け行くのみ、片時も早く曉けよと待つ身の辛さ、

廣き世の中、まゝならぬ戀のため、世間の寢静まりし今ごろ、我身と同じ思ひの辛さに責

められて、まんじりともせず一夜を待ち明かす人、どれほどあるやらと、はかなき事も力と頼みて、暫し心を慰めながら、折しも響く柱時計に耳を澄ませば、もはや曉方に近き三時、やれ嬉しや、

たゞ夜の明くるさへ嬉しきに、これほどの思ひ、これほどの辛さ、せめて百分一も其人の夢に通へば、いかに嬉しかるべきぞ、

あたり近所では錦町の名物といはれ、どこの往來でも立停りて振り返られ、わけて近來は四方より争うて縁談の絶え間なき娘を、そのまゝに捨て置く親心、何と思つてか、

阿父は今年六十一、片手間に或大家の地所家屋を差配しながら、奢らねば其身を食ふに困らぬものありて、廣からねど借屋住居でなく、現代には聊か通ぜざれど、元來の江戸ツ子風

に面白く角の取れた氣性、野暮と愚痴とは第一の禁物、さばけた阿爺と人にもいはれ、お絹の縁談には必ず同じ口上、あッさりとせし斷り様、

「不束なものを有難うがすが、あれは當分まだ一二年、あのまゝに置きませうよ、あしからずね」

そのお絹が今年の春以來、しげく川徳の許に行く事を知りながら、何ともいはず知らぬ顔、をりく、惣長の訪ひ來る時は、お絹よりも我先に立ちて馳走すれど、わざと一度も川徳を尋ねし事なく、つまり我娘に對しては舊式の頭腦より割り出したる一種の自由戀愛を許せし阿父、たまぐ微笑を含みて川徳の事をいへば、

「おい、川田さん近頃、どうなすつてるね、今時の若さには實に珍らしい人だよ、始め二階を借した時から乃公は、さう思つてるんだ、どこを見ても嫌に薄ッぺらな青二歳ばかり

りウヨ／＼してる中に、あの年で、あゝ男らしく、どツしりと重味のある人間はないぜ、加之も無口で無頓着で居ながら、いふにいはれない自然の愛敬があるから堪らないよ、きツと後日には大した人になるね、乃公が見込んだんだ、乃公が請合ツた以上、間違ひツこあるもんか」

さうでなくても人しれぬ胸を焦せるお絹、をり／＼かういふ事を現在その阿父の口より聞かされては、燃ゆる焔に油を注ぐが如く、もはや生命も惜しからぬ戀、その生命がけの戀さへ、まゝならぬ前夜の思ひに勞れ果てし曉方、とろ／＼とせし今朝まだ起き出でぬ娘を襖越の阿父、

「お絹、いつも早起だに、どうしたんだい、馬鹿に今朝ア遅いぢやないか、もう七時だぜ、おい、お絹、起きないか」

夜具に顔を包みて襖越の籠れる聲、

「お父さん、すみませんが、わたし今朝、頭が痛くツてね」
そろ／＼戀に病み始めしか、

竹町を出で、七日目、上野の廣小路にて不意に志長に出逢ひしより四日目、今日は俵にも乗らず用なき身を急ぎもせず、着流しにステッキを引ずりながら、ぶら／＼と銀座の片側を歩みし川徳、

折しも午後五時頃の出盛りに尾張町の角、電車へ乗降の混雑と電車の切れ目を待てる人垣に堰かれて、暫し足を停めし前に十四五の中學生、ふと振り返りし顔を見れば、お絹の弟、幸太郎、

「や幸さんか」

面相の何とやれ姉に肖たる美少年、學校の制帽を軽く脱いで、肩より懸けしカバンを揺りながら微笑を浮べ、

「川田さん」

「ちよいと見ない内に、大きくなつたね、は、は、は、どこの中學だね」

「神田です」

「神田の中學から、今時分この邊を、どうして」

「僕の友達が、京橋に居ますから今まで其處で、これから歸らうと思つてるんです」

「は、ア、さうか、中學の何年だね」

「二年です」

「二年、早いもんだね、二階を借りて居たときは、まだ小學校で、をりく駄々を捏ねてる聲も聞いたがねエ、は、は、は、お父さんも、お母さんも達者だらうが、よろしく言つて貰ひたい、久しく御無沙汰をしたとね、時に五時過だ、どツかで夕飯でも奢らうかな」

「僕、急ぐから、歸ります」

「まあ宜い、途中で川田に逢つて、遅くなつたといへば宜いよ、もし吐られたら、姉さんが何とかしてくれるさ、は、は、は、遠くちやアいけないね、幸ひ其處に洋食がある、さア行かう」

ふしぎの縁といはふべし、始めて入谷の住居を見付け出せしも、この弟、今また思はぬ不意に出逢ひし其弟を引連れて、カフェーに入り、これは嫌か、これにするか、こ

れを食ふかと、この一少年を主人公としての馳走振、

辛からば、たゞ一筋に辛かれといふ、昔も今も同じ人情、もしこれを姉のお絹が聞けば、また猶更ら哀れに思ひの増す種、

三皿四皿の洋食を重ねながら、現在の我弟に向ふが如く、

「幸さん、しツかり遣れよ、段々と世の中が進んで来るからね、尋常ぢやア辻も無効だぜ、勉強も勉強だが第一、身體を丈夫にしないといけなげ、何をすることも身體が基だから、勉強家たると共に運動家となるんだ、大に本を讀んで、大に暴れるさ、はゝゝゝ」

「長さん、長さん逢ッてよ、昨日ね、川田さんと、銀座で」

「や、逢ッつたのか、そりア宜かつた、實は僕だけ逢ッて、お絹さんまだ逢はないんだから少々、すまないやうな氣がして居たのさ、これで互に恨みツこなした、はゝゝゝ全體、どこに居るんだね、いつ頃、歸るといひましたね、僕と違ッてお絹さんのこツたから、定めて如才なく聞いたらうし、川徳も自然の人情、その場で振切る筈はなし、兎も角お目出たう、おたのしみ、さぞ御安心でせうよ、はゝゝゝ」

「あらまア、じれツたい事、逢ッたのは、わたしぢやないのよ、弟ですワ」

「なアんだ、弟さんかい」

「弟が學校の歸りに京橋の、お友達へ寄ッて、五時頃、銀座を歩いてると、尾張町の角で不意に出逢ッたんですとさ」

「それぢやア仕様がな、たゞ逢つたといふだけの事だから」

「ですから、わたし、さんざ弟に言ッてやりましたの、馬鹿だね何故お前その時に居處を聞かなかつた、なぜ隨いて行かなかつたと、すると弟も生意氣ですよ、それほど姉さん川田さんの居處を知りたければ警察へ搜索願ひを出しなさいと、まア憎らしい、かうですの、わたし口惜しくッて、腹が立ッて堪らないでせう、すぐ弟の大事にしてる、寫真帖の表紙を引破ッてやりましたら大變に怒り出して、わたしの脊中を力まかせに、ぶつんですもの、近來は學校で相撲を取ッたり柔術を遣ッたりして居ますからね、ま痛い事、まだ今日も痛いんですよ」

「は、川徳も罪な男だ」

「ですがね、長さん、また後で聞きましたの、その時、川田さんに洋食を喫べさして貰ッたんださうですよ、そしてね、まるで自分の弟を可愛がるやうに、これを食への、あれを食へのと、いろく御馳走しながら、勉強しろよ、しツかりしろよ、身體を丈夫にしろッてね、まア何といふ優しい、深切な方でせう、わたし、それを聞いて、おもはず泣きましたワ」

お絹の目に一ぱいの涙、そツと袖に拭きながら、

「そしてね、長さん、弟が遅くなるといへば、なアに遅くなッても宜いよ、姉さんが何とかしてくれると、さう言ひなすツたさうですワ」

徳長、ごそくと蟹の遁け出す如くに這ひ出して、

「もう澤山、お絹さん、その邊で止して貰ひたい、弟が道具に使はれて僕が惚けを聞かされる役だ、は、は、は」

一年間、入谷より千住の工場へ通ひし時は、相變らずの襪縷洋服にブリキの冷飯辨當を小脇に抱へて、依然たる其日暮しの職工なりしが、十日以前、竹町の二階より梯子段を降りて門口の闕を跨ぎしは、境遇の展開、運命の變化、いよく實際の腕試しに世の中へ踏み出せし川徳の第一歩、

いかに踏み出せしか、その十日目の夜の九時ごろ、ぶらりと竹町の門口へ立歸りし川徳、まだ寝ざる表の格子戸を開けて内に入り、

「お婆アさん、ちよいと歸つて來ましたよ、二階の奴、あゝいふ人間ですから不在中、定めて蒼蠅く御厄介でしたらう」

「おや、まア川田さん、どうなさいました、神田からも貴君、毎日ね、こゝへ來て蔭ながら御心配ばかり申して居りましたよ」

「はゝゝ、鐵砲玉ですからな」

二階の惣長、聲を聞くや否、どかくと梯子段の半まで、あとの四五段を飛び降りて思はず両手を挙げながら、ぐるぐると川徳の周圍を躍り廻り、

「やア歸つて來たね、待ッて居たぜ、待ッて居たぜ、お婆アさん湯が沸いてますかね、湯が、なアに茶はあるんですよ茶は、さア君、さア上つた」

「何を騒ぐんだ、靜にしろッ」

「さう無理な事いふなよ、これが靜に落著いて居れるかね、まア氣の濟むまで騒がしてくれ、さア大變だ、さア歸つて來たぞ、かういふ時に電話があると好いなア、ある奴は畜生、よけいに二個も三個も持ッて居やアがる」

川徳、そのまゝ振返りもせず二階へ上り行く脚下に、自己の頭を打ち續けて駈け上りし痣

長

「全體、ど、何處に君、どうして居たんだ、過日、上野の廣小路で不意に出喰した時、驚いたね、がらりと變つた羽織袴で、加之も後押の自用车とは驚いたよ、おツかけたんだぜ、一生懸命に追ッかけたが無効だった、は、よほど急ぎの用らしかつたね、わざわざ届けてくれた三十圓、たしかに請取ツてね、まだ二十七圓の餘も残ツてる、お絹さんの弟にも銀座で逢ツたさうだな、洋食を奢ツて貰ツたといふ事から君、姉弟喧嘩が出来たほどの騒ぎだぜ、は、兎も角も安心した、まさか、そんな筈はないと思ツてるがね、三四日といふのが七日になツたり、また七日が十日になツたり、その間に金が來たりするんだもの考へ様に依ツては變ちやアないか、これが置土産で、このまゝ歸らないかとも思ツて見たりね、いろんな氣を廻して、さんざ苦勞したよ、そこへ持つて來

て苦勞性のお絹さんが毎日、可哀さうに半泣きの顔で、わざ／＼心配を添へに來るんだから堪らないよ、お絹さんの心配と自分の心配と兩方一度に引受けて、がツかりしたね、は、しかししまア安心した、安心すると猶更ら君、がツかりするぜ」

あかの他人、兄弟でも親類でもなく、たゞ同じ工場に同じ職工となりしだけの事、同じ家に同じ土鍋飯を食ひしも互の都合上より出し合ひ貧乏の寄合ひ世帯、友達としては寧ろ人間の相違、あまりに懸隔して一日も同居すべき筈なけれど、ふしぎの因縁に離れもせず去りもせず、わづか十日の別れに懐しけの志長、例の狼狽へ氣味に談話の前後を取亂して喜びながら、第一の不審、

「どうして君、たツた三日か四日の間に、あゝ立派な風俗が出来たんだよ、不意に廣小路で逢ツた時、全く驚いたね、電車の十文字で立往生して居たから氣が付いたが、もし途

中で摺れ違へば逆も分らないね、全體、どこに居るんだ今、何をしてるんだよ」
いかにも志長としては不思議に堪へぬ顔色、川徳は羽織を傍に脱ぎ捨て、大胡坐の頼杖、半窓の闕際に持たせながら、

「おい志長、演劇が好きだな、をりく立見に往つたらしいな」

「好きだとも、飯より好きだが演劇の談話ぢやアないよ」

「は、まア聞け、俳優が舞臺で、いろんな藝を演る時、いろんなものに變つて出るがその幕間は、いくら長くつても、一時間は掛るまい」

「一時間も掛つて堪るかね」

「それだ、そこだよ、ほろ著物一枚の乃公が三日目に羽織袴で後押の俵に乗つたのが何故、不思議だ、少しも不思議はないぢやアないか、おい志長、世の中は演劇の舞臺だぜ、人

間は舞臺に出る俳優だぜ、それく社會にある種々の階級と種々の職業分類はつまり何座とか何々劇場とかいふと同じ事で、かうして貴様と話してるところは樂屋だ、そこで乃公は俳優と作者とを兼ねて、座は氣に入らないがちよいと小手調べの試みに化けて見たのさ、はッはッはッ、この流で行くと貴様の方が寧ろ乃公よりも名優だ、その頓狂さ加減、その慌てさ加減、その調子外れに出來た工合、加之も元來の自然で、わざとらしい藝のないところ、實に喜劇の主人公だよ、は、ま、ま、ま」

暫し小首を傾けし志長、自己の好きな道に説かれて、平生よりも早く聊か悟り氣味の顔色おもはず膝を叩きながら、ぐツとその膝を進め、

「なるほど、さういへば、さうだな、しかし君、演劇には女形が入るぜ、どんな演劇でも女のない演劇はあるまい、ところでその女形だ、可哀さうに君、ありやア悲劇だよ、

兎も角この樂屋へ呼んで來ようか」

川徳、急に片手を打掛つて、

「待て、まだ女形の出る幕ぢやアない」

わづかの日數に川徳の風俗、がらりと變りしを俳優の舞臺に譬へし外、いかにして變りしか、一切その理由をいはず、現在また何をしつゝあるか一切これも打明けず、たゞ満面に微笑を浮べながら、

「まだ幕が開いたばかりだよ、この俳優これから舞臺の中央で本藝に掛るところだからねもう暫く待て、今までは脚本やら衣裳やらで、ちよいと暇が入った、はゝゝゝ冗談は置いて志長、いよく乃公も世の中へ出られさうだからな、まア安心しろ、どうせ乃公一人のために作られた世の中でなし、さう急には巧く思つた通りには行くまいが兎も角も

三四年、じつとして居ても食ふに困らないだけの事は儘に出来る、生活が問題になつて居ちやア人間これ肥料會社の製造器械で、いはゆる糞だわけだ、はゝゝゝいくら腕があつても無効さ、逆も面白く働けないよ」

志長、仰向けし不審の小首を立直して、頻りに首肯しながら、

「や、わかッた、もう何もいはない、もう何も聞かない、黙つてるよ、ぐすく餘計な心配するよりも、下手な思案を止めて、おい志長、かうなつたぜといふまで待つてれば宜いんだな」

「さうだ、さうだよ、人を的にするなといふが、貴様ア萬事この乃公を的にして暢氣に待つてろ、こゝ四五日の後には、なるほどといふ事が分るからな」

「ありがたい、つまり君に負さつて居りやア怪我はないんだ、いくら飛んでも跳ねても同

「場所ばしよで一步ひとあしも世よの中なかへ出でられない僕ぼくのやうな人間じんげんが、たゞ負おンぶで行ゆくところへ行ゆかれるといふ、こんな割わりの好いい事ことアない、たのむぜ君きみ、待まッてるぜ君きみ」

「よし、大丈夫だいぢやうぶだ、萬一まんこの乃公おれが途中ちゆうちゆうで躓つまずいて、もし倒たふれるやうな事ことがあつても、貴様きさまだけには怪我けがをさせないからな」

「なアに君きみ、もし君きみが倒たふれる時ときは遠慮えんりよなく何處どこへでも、おッほり出だしてくれ、時ときと場合ばあひで邪魔じゃまになりやア、叩たたき付けてくれても宜いいぜ、僕ぼくのために君きみの氣きを外そとして、はッとさしちやア濟すまないよ」

「うれしい事ことをいふ奴やつだ、しかし今夜こんやア、これから歸かへるぜ、歸かへるも變へんだが、まア出でて行くんだ」

「今夜こんやだけ君きみ、泊とまッても宜いいちやアないか」

「いや、さうは、ゆかない事ことがあるんだ、また來くるよ、もし神田かんだから來きても、つまらない事ことをいふンぢやアないぜ、ありやアね、あれで、あれの運命うんめいを持もッてるんだ、は、は、は」

今いま、どこに居きるともいはず、現在げんざい、何なにをしつゝありともいはず、たゞ安心あんしんせよと其そのまゝ立たち出いでし川徳かはとく、これを門口かどぐちに送おくり出だせし志長あやちやう、

「どんな用ようがあるか知らないが一夜ひとよぐらゐ泊とまッたつて、よかりさうなもんぢやアないか、あすの朝あさ、早はやく出でれば宜いいだらう、さう急いそぐとは思おもはなかつたからね、うツかりして餘よ計けいな事ことばかり饒舌しゃべッて仕舞しまッた、實じつは君きみ、いろく眞面目まじめに話はなしたい事ことがあるんだよ」

かういはれては、まさか無言むごんにも立去たちきれぬ川徳かはとく、

りかけた以上、やはり仕事のあるところで寝ないと、いけない、まア今夜ア此まゝで近
近また来るからな、つまらない心配せずと例の暢氣に待ッてろ」

「いつ来るんだ、いつごろ歸ッて来るんだね」

「早くて四五日、もし遅ければ、もう十日あまり掛るかも知れないが、いくら間違ッても、
これから前途を半月と思へば大丈夫だ、どこに何をしておくか一切それを明さない代りに
今夜、ちよつと乃公の顔を見せに来たんだよ、また貴様の痣も見たくッてね、はゝゝゝ
たゝ外貌ばかりを見る世間ぢやア、その痣は面の疵だが乃公の目からア却ッて其痣が嬉
しいんだ、どうして貴様のやうな瘦ッこけた貧弱の痣ッ面が乃公の目に懐しいかなア」
「おい、おい、そんな事いうてくれない、何だか遠いところへ行かれるやうな気がして、
心細くなるよ、全く君、早くて四五日、いくら遅くなッても十日ぐらゐに歸るんだらう」

な、此まゝ捨て、行かれちやア恨むぜ、泣くぜ」

「馬鹿な事ははずと待ッてろ、キッとして今度こそ土産を持ッて来てやるからな、それまで相
變らず入谷以来の樂天主義で、誰に遠慮なく痣長式を發揮して居れ、はゝゝゝ」

「君、君、神田から来たら何と言ッて置かう、どうせ明日の朝、来るよ、どうせ爪で引ッ
搔かれるぐらゐは、覺悟してゐるが、せめて君から、何とか一言、かういうて往ッたと、
傳へてやりたいね」

返事もせず振向きもせぬ川徳、そのまゝ宵闇にステツキを引ずる音ばかり残して歩み行く
背後より六七間、そツと忍び足に追へば、忍ち別人の如き鋭さ、

「こらッ」

しゆッと思はず首を縮めし痣長、ぐうとも、すうとも得いはず、そこにそのまゝの棒立、

宵闇の辻に消えし影を透かしながら、殆ど氣ぬけの如く茫然と此方へ向き直れば、向き直りし三四間の先より、お絹また痣長を透かし見て、

「長さンですか」

「やアお絹さんか、遅かったよ遅かったよ、たった一步だった、つい今だった」

「何ですの」

「何ですのぢやアないよ、不意に川徳が戻って来てね、今そこへ出て往ったところだ、何故、もう少し早く来ないんだ、そゝその辻を今、そこへ曲ったばかりだ」

おもはず走せ寄りしお絹、口惜しげに、痣長の袖を掴みて、

「わたしよりも長さン、何故、もう少し引止めて下さらないんですよウ」

「いくら止めても止まらないんだ、随分と骨を折って見たが無効だった、しかし僕と違ッ

てお絹さんなら、さう酷い事もいふまい、駈け出せば、まだ追ッ付くよ」

「あの辻ですか、あの辻を長さン、どっち」

「右だ右だ、右へ曲った」

きくや否、ばたくと夢中に駈け出せしが、また俄に立停りて、

「よしますワ」

「どうして」

「折角、追ッかけて逢ったところで、わたし何も、よう言はないから」

「そんな氣の弱い事があるもんか、ぐづくしていると分らなくなるよ、早く早く」

「では逆に此方の辻から廻ッて見ませう、わざと知らない、つもりで、もし運が善ければ、自然に出逢ひますね」

「なるほど、そりやア智慧だ、あの辻を右だから此方の辻を左へ曲ッて、さうだ、うまく遣ンなさい、轉ンぢやアいかンよ」

お絹そのまゝ、宵闇を縫うて左へ走せ出せば、あとに残りし志長、ますくじツとしては居られず、川徳の後を辻まで追ひしが、また考へ直してお絹の後を半町あまり、どツち付かず、右と左の兩方へ只うろく、

お絹は氣ばかり先に宵闇の脚下、あはれや幾度も躓きながら、幸ひ轉びもせず、こゝへ來る筈といふ軒並びの角より、曇り勝の星明りに透して見れば、それかと思ふ人の影、

今更に轟く胸を押へながら、二三間の此方まで近づきしは、どうやら人違ひ、歩み出して摺れ違へば、全くの他人、

あれほど急いだに、口惜しや女の足、おくれたかと前後を見廻せば今しも摺れ違ひし人の

後よりステツキを引する音、このごろ變りし姿は知らねど、のツそりとせし身體の調子、悠々と慌てぬ歩き工合、正しく其人、

飛立つほどに心は嬉しけれど、おもはず身を縮めて道路の片側を歩み、はつきりと見えぬ顔さへ差俯きながら、次第に近づけば、急に足を停めし川徳より、

「お絹さんぢやないかね」
嘘も戀のため、始めて驚きしが如く、

「あら、川田さん」
川徳、靜に立寄りて、

「今ごろ、何處へ」
今ごろ何處へ行きますものかと、いはねど恨めしく其まゝ無言、

「すべて志長から聞いたでせうな、實は少々、都合あつてね、暫く外に居るが、用の濟み次第、歸つた上で萬事、わかる筈だ、それまでの間、まア鐵砲玉だ、は、は、は」

「いつ、お歸りなさいますの」

「さア、何日と極める事は出来ないが、もう、十日ぐらゐる經てばね」

「大變、お風俗が急に、變りました事ね」

「は、は、は、いくら風俗は變つても、人間は同じこつたよ」

「さうでせうか」

「さうとも、包んだ風呂敷だけが變つたのさ、は、は、は」

「笑つてばかり、在らっしゃるワ」

「怒る事がないからさ、は、は、は、また笑つたが、お絹さん、夜はあまり歩かない方が宜い

よ、男と違つて、家で心配するだらうから」

「い、え、少しも心配いたしませんの、わたし、どこも外へ、行かないといふ事を、よく知つて居ますから」

「それにしても、夜はいけないよ」

「では、これから、出ない事に致しませう」

「別に差圖するんぢやアないがね、時に幸さん、大きくなつたね、過日銀座で逢つたよ」

「さう申して居りましたよ、そして、いろいろ御馳走になつたと、まア幸福な子ですワ」

「今に、お絹さんへも、うんと御馳走するよ、は、は、は」

「ほんたうですか、わたし馬鹿だから、ほんたうにしますよ、もし欺されると、わたし、わたし」

平生よりも小さく低く細き聲、

「わたし、死んで仕舞ひまますワ」

川徳お絹の立談を、宵闇の軒下より中腰に窺ふ惣長、出たくはあれど今更ら不意に出られもせず、耳に手を當て、聞けば、まだ盡きぬ二人の聲、

「今いふ通り少々都合あつて外に居るが、十日過ぎには、面白い土産話をするからね」

「川田さん、きつと待つて居ますよ」

「ぢやア、もう歸つた方が宜からう、遅くなるよ」

「わたし、ちよいと、長さに」

「ひどく近頃は惣長と交際よくなつたね、は、は、は」

「だつて、顔に似合はない氣心の優しい、深切な人なんですもの、わたし今、外に打明け

て、話す人もないんですから、猶更ら長さを力にして居りますワ」

「あまり力にもならない奴だが、惡氣も憎氣もない男さ、例の頓狂に調子づく工合さへ承知して居れば、何を明しても安心は安心だ、まづい面だが心は美しいもんだよ」

「全くですワね、かはいさうに何故、あゝ黒く骨と皮ばかりに瘦せつこけて、おまけに御丁寧な痣まで出来たんでせう、せめて痣だけでも取つてあげたい事ね、わたし、始めて逢つた時は、芝居に出る山賊の子分でも見るやうでね、うす氣味わるくつて談話するも嫌でしたワ、交際つて見て、あんな好い人とは知りませんもの、ほ、ほ、ほもし長さがおかみさんでも持つ時は、わたし一生懸命に探し歩いて、びつくりするやうな別嬪を、お世話しようと思つて居ますの」

「こんなところに立つて、くだらない事をいふよ、は、は、は」

「御恩返しですワ」

「何の恩返しだね」

「知りません」

暫し無言の川徳、そのまゝ二足三足を歩み出して、振返りし聲、

「早く歸つた方が宜いよ、もう九時だ」

またステツキを引すりながら立去りしを、追ひも得せず呼び返しも得せず、茫然とせる背後より、そつと歩み寄りし志長、

「お絹さん」

「あら、まア驚愕しますよ」

「驚愕させるぐらゐの價値あるよ、さんざ人の面を棚卸し仕て、芝居に出る山賊の子分は

酷いね、はゝゝゝ」

お絹、おもはず闇の中に手を合して、

「長さん、堪忍して頂戴よ、わたしね、決して、あんな事、いふ氣ではないんですの、あんまり川田さんが急ぐから、つい、その代り御恩返しは、全く、わたし、ほんたうなんですよ」

頭は古く身は老いて時勢の置去りに逢へど、これを追はむともせず冷かに見送りて、江戸ツ子の記念に残りし爺と婆、年の割には聲も若く氣も若く、笑ひながら二階の不在を幸ひ、禿けたる額越に軽く見上げて、

「ねエ婆アさん、二人とも居ないやうだな、あまり歸つて來ないから能くは知らねエが、

さう悪い人間でもないらしな」

「悪いどころか、好人達だよ、とんだ好人に二階を貸したと思ってるんだよ、第一お前さんが居なくとも用心が、よしね、それに痣のある恍惚の方が顔に似合はない、さッぱりとした面白い人で、をりくく笑はされるから、退屈凌ぎには持つて来いさ、ほッほッ」

「どうして絹ぼうが知ってるんだらう、あの内氣な子がわざくく自分で来て是非、二階を貸してくれといふんだから、よほど前から心易いと見えるな」

「心易い段かね、お前さん絹ぼうは今年、もう十九だよ、いつまで内氣の子どもで居るもんかね、も一人の男らしい、川田といふ方に大變な騒ぎさ、まるで夢中なんだよ、委しくは聞かないが、ちよいく出る談話の工合を取合して見ると、あの川田といふ人に、

さる大金持の娘が一生懸命だったんださうだ、だから絹ぼうの方も負けない氣で、うまく本人を引っこぬいて来たらしいんだよ、ほッほッ、今時の娘ツ子は油断がならないねエ、わたし等の昔と違ッて、おとなしい顔をして居ながら案外に大膽で、する事が素早く凄

「や、さうか、あの絹ぼう、さうかい、そいつア洒落れた事をしやアがったよ、ほッほッ、そして婆アさん、川田といふ男の方は、どうだね、引っこぬかれて来るくらるだから、まさか嫌ぢやアないんだらう、もう出来てるのかい、まだかい」

「それがね、お前さん、妙なんだよ、いくら絹ぼうが騒いでも、男の方は澄まし込んで平氣なもんさ、そのくせ、いふにはれない深切な、優しいところもあッてね、可哀さうに絹ぼうは猶更ら夢中になるぢやアないかね」

「ふざけた野郎だ、考へて見ろ、どこへ出しても誰が目にも十人竝を飛び越えた女だぜ、おそらく絹ぼう程の容貌は、さう世間に澤山ねエぜ、それに畜生め思はせ振をするたア生意氣な野郎だ、絹ぼうの阿父と乃公たア餓鬼の時から兄弟同様の友達だからな、さう聞いちやア、この乃公が黙ッて居れねエ、外の事と違ッて喧嘩も出来ねエが、乃公が直に談判してやらう」

「お前さん、また例のお株を始めたよ、いくら何でも、この道ばかりは、さう押付け業に行かないよ、第一その川田といふ人、過日から居ないんだからね」

「野郎、遁けたな」

「ほ、ほ、遁けたんぢやアないよ、こゝへ来た時は随分、見苦しい風だったかね、十日あまり前に出て前夜、ひよつくり歸ッて来た風俗を見ると、まるで人間が變ッたやうに立

派だったよ、理由は知らないが、何でも外に身の立つ事があるって、急に出世したらしいのさ、しかし近々また歸ッて来るさうだからね、歸つた上の事だよ」

「ふう、さう聞けば、たゞの青二歳でもないらしいね」

「どうして、お前さん、わたしの見たところでは、うかくすると絹ぼうの惚れたぐるんで、顔の雑作を崩すやうな男ぢやアないよ」

「婆アさん、譽めるも宜いが、何故さう變に男の味方ばかりするんだね、なぜ絹ぼうの力になつてやらないんだ、現在この二階に居る人間を、それほど思ひ込んで毎日のやうに來る絹ぼうと、今まで他人にして置くといふ事があるかね、年を取ると身體の乾ツからびるばかりでなく、人情まで無くなるんだなア」

「ぢや、わたしに人情がないといふのかね」

「ないぢやアないか、いくら皺になつても女ア女の味方してやるのが人情だ、相手の男ばかり譽めたつて、なんになるかい、もし絹ぼうが氣に入らなきア、その野郎、叩き出して仕舞へ」

元來の壯健體を一年間の職工となりて、間斷なく五體を鍛え上げし川徳、今その五體に何の用なく悠々たれど、また間斷なく働ける頭腦を休めんため、暫しの暇を盗みて夕陽に近き日比谷公園の散歩、わざと人の多き場所を避けながら、ぶらぶらと青葉がくれの小徑を傳ひし向ふより、茂れる樹間を出でて此方に歩み來りしを見れば、高岡子爵の弟、例の鼻目鏡、ぴかりと光りしが、十間あまりを隔てし近眼いまだ我とは知らぬ體、面倒な奴、うるさい奴、もはや逢うて用なき奴、語るに足らぬ奴なれど、また或意味に於

ては氣の毒な人、あはれな人、大體は罪のない人と思ふうち次第に近づいて外に道なく雙方より歩み寄れば、すれ違ふにも聊か互の身を横に狭き顔と顔、

「や、高岡さんですか」

黒く膏染みし職工服に笠を伏せたる如き破れ帽子の川徳と、垢染みし木綿の素袷に繩の如く糾れたる兵兒帶の川徳と、その見苦しき川徳ばかり目に入りし高岡晴行、がらりと變りし今の川徳を見て、いかにも訝かしけの顔色、いかにも驚ける風情、加之も茂れる樹間の夕ぐれ近く四邊に人なき不安の念、井村の手より壯士を向けし闇討一件に猶更ら薄氣味わるく、何をせらるゝかと恐れを抱いて殆ど胴震ひの通け腫、

あはれむべし、華族といふ肩書を去り總ての背景を取りて其まゝの人間一疋となれば、山奥でもない大都會の中央に設けられたる公園を歩みながら、現在これほど弱く脆く青くな

るものかと、川徳は心の底に呵しく、わざと殊更ら懃懃に帽を脱ぎ微笑を浮べて、

「御散歩ですか、先達は御許可もなく不意に伺ひまして、とんだ失禮を致しました、その後一度、是非、お詫びかたぐいと存じながら、つい御無沙汰に打過ぎまして、のみならず却って、御迷惑とも心得ましてね、は、は、は、」

色を失ひし高岡晴行、聊か安心せしが如きも、なほ何處やらに落着かぬ體、

「そのうち、また、お出で下さい、ちよいと、今日は急ぎますから」

「は、ア、御散歩でなく、お急ぎですか」

「今晚はホテルに友達と會食の約束があつて、そろく時間です、もう十分か十五分ばかりしよない」

「いや、そのお時間は強ひて妨げせんが、お目にかつたを幸ひ、少々お談話の致したい

事が御坐います、五六分間いかゞです、青葉がくれの夕暮に身分の違つたものが打解けて、これまで互に考への違つた事を面白く語るのも、また風流情事的一端ぢやアありませんか、は、は、は、」

あまりの不意に打たれ、あまりの不安に襲はれ、一時は殆ど色を失ひつゝ震ひながらの遁け腰となりしが、また意外の敬意を拂はれ案外の微笑に迎へられ、幸ひ夕陽に近く人なき池の邊りへ伴はれ、あづま屋の下に腰をうちかけ川徳まづ口を開き、

「高岡さん、先達、お屋敷へ伺つた節は、實のところ、失禮ながら悪戯半分で、多少また闇討一件に對する癩癩の残りもありましたが、こゝで今日お目にかつた川田は自分の境遇一變と共に、全く何等の騒りもなく打解けて、お談話いたしますが、その後、あの杉浦の娘、どうなりましたね、あれの心理状態は或意味に於て貴君の最も信任される

井村さんよりも寧ろ、いや、なほ進んでいへば本人の両親よりも却って、この川田が能く了解し得る理由があるんですから、もし萬一まだ御念頭を去らないものとすれば、あらためて川田徳次郎、お談話する事がありますよ、敵に取っては少々、むづかしい厄介な奴ですが、かう曝け出して打割った以上、決して間違ひのない事をいふ男ですぜ、はは、戀に理窟はない、理窟はぬきにしてあの久子まだ貴君の御印象に刻まれて居ますか、それとも一切、お忘れになりましたか、わざ／＼私の方より争ったでもないが、暮れかゝる青葉の蔭で一時は面白くなかつた貴君と、かうして綾に搦んだ情事纏綿の意地を解き合ふのは、小説を読むよりも興味があります、材料の人物が、皆それ／＼現在に生きて居るから、組立に嘘がなくて、猶更ら面白い、は、高岡さん、いかゞです」

じつと高岡晴行の顔を打守れば、まだ何とやら不安の色に包まれて心に思ふ事を語り兼ねたる風情、川徳さらに身を屈めながら差覗くが如く、

「これは今、この口から出すべき事でなく、また現在お談話するほどの程度にも進んで居りませんが、まづ貴君の疑念を解くため、従つて自分の立場を明白にするため、ちよいと漏らして置きます、實は川田に、あれならばといふ、未來の妻がありますよ」

高岡晴行、ひよいと上げし顔を、にこりと迎へて、ステッキに両手を重ね願を支へながら、

「話されたか話されないか知りませんが、過日、井村さんが一度、竹町へ尋ねて來られた節、そこに居合して、お取次をした女、あれです、他日もし妻帯の時機と必要があつて、それまで川田の試験に首尾よく叶つたとすれば、あれを妻に持つ考へです、今日のことこ

る實際、あれ以外に戀も情もない川田徳次郎ですから、杉浦の娘、久子、ありやア全然、

よその花ですよ、は、は、は、

お絹は今、どこに居るぞ、あれ以外に戀も情もないといふこの一言を聞かしてやりたし、既に入りし夕日、あかくくと猶いまだ西の浮雲を染め残せど、茂りし日比谷公園の樹蔭うす闇く人は次第に去りて、池の面に霧を吹く鶴の噴水のみ白し、

あづま屋より立出でし高岡晴行、いかにも男らしき川徳の態度と萬事を打割りし最後の一言に、今は却つて頼母しけの微笑を浮べながら、

「實際、君を、さういふ人とは少しも知らなかつた、かうなると井村の奴、甚だ宜しくない、君に壯士を向けたのも全く彼の業だよ」

「なアに、井村さんが悪いのぢやアありません、たゞこの川田を間違つて居ただけの事で、

あゝいふ場合あゝなれば勢ひ、貴君に對する井村さんとして、あれが當然です、もし外のものなら仕損じた後が猶更ら面倒で、ほろ壯士、きつと華族の貴君に蒼蠅く搦みますぜ、一切その點は無かつたでせう」

「それはない、それは井村が打切つたやうだ」

「やはり、遣り手ですよ、破れても後始末が拙くない、但し相手の久子に對するのは別論です、問題が腕で行かない戀愛關係ですからな、あれだけは流石に井村さん、少々、はまり役者でないらしかつた、智慧を出せば出すほど逃けますよ、は、は、は、兎も角、かう打解けて、お談話した以上、この川田に一度お任せなさい、この際、自分の事をいふのは聊か變ですが、問題の根本的に没交渉の井村さんが策を用ひたり智慧を出したりすると違つて、いはゞ其間に一種の先入力を持つてる川田が直接、懇々と説くんですからね、

つまり早く申せば、貴君は味方よりも敵に譽められる人となつて、新たに出直す理由です、この川田これを仕上げて何等の要求もありませんから御安心なさい、ただ自分の生涯中に、かういふ事があつて、その終了を、かういふ心持の宜い事にしたとなればそれで満足です、いやしくも二重の戀をする男ぢやありません、もはや既に未來の妻を豫定した川田徳次郎を、貴君の名代として一應あの杉浦へ遣つて御覽なさい、は、は、は、驚きますよ、あまりの意外と、あまりの不意打に呆れて、びっくり仕まずぜ、しかしその、びっくりして、あまりの意外に言句もなく驚いたところが即ち先方の心機一轉するところ、そこに活ける効果を産み出せますよ、もし萬々一、出来ないとしても、このまゝで葬らるゝよりも貴君としては生きる筈ですからね、是非、明日、この川田が貴君の使者になつて向ひませう、向はれた杉浦の父子、どんな顔をしますかね、は、は、は、

極端なる貧富の對照、寢ても覺ても、絶えず杉浦家の大門に睨まれて、傾きし棟割長屋に其の日暮しの土鍋飯を食ひ、ほろ洋服を纏うて千住の工場に通ひし三人のうち、わづか一月あまりの今日、堂々たる風采に綱ッ曳の俥を走らせて、その大門より眞正面の玄關に乘入るものありとすれば、正に是れ一篇の小説的、

されど事實は小説よりも奇にして、その奇を奇とせず寧ろ尋常と心得たる川徳、大門に走せ入る前、ちらと車上に我身の置きし跡を見返れば、誰れも住むものなく軒場を蜘蛛の巢に閉ぢられて猶更ら淋しけなる空屋、流石に懐かしく、これのみ却つて川徳のために小説的の心地せり、

いまだ主人の銀行に出でざる時刻を考へ、その玄關に悠々と俥を降りて、

「たのみます、たのみます」

風俗は變れど、顔を見るや否、あつと驚くべき筈を、ふしぎの幸ひ、取次に出でしは此ごろの新參もの、たとひ新參ものでなくとも、おめく、玄關より引返さぬ覺悟の川徳、靜に一葉の名刺を差出して慇懃の言葉、

「御主人、在らッしやいますか、お手間は取らせませんから、ちよいと御意を得たいと取次いで下さい」

その名刺は高岡晴行の四字、

主人の杉浦長藏としては、娘の一件以來、暫く打絶えて音もなかりしが、いかなる用談にせよ今更ら謝絶の出来ぬ人、

お通し申せの一言を傳へ來りて取次に案内され玄關を、上りて右側の應接所に入りし川徳、

一年間、たゞこの大門を朝夕の目に見るばかり、我場を出る時は足の爪頭を向け、我場に歸る時は踵を向けし外、いまだ門内一步も知らざりしが、今日こゝに始めてその大門を潜り、この應接所に入りて、當家百萬長者の一人娘に我を知れる久子あれど、わざと知らぬ顔に他人のため戀の使ひに來れりと思へば、人生の曲折さらに面白く、綾に搦みし人情ますます、深き趣味あり、

應接所の窓越に飛石傳ひの樹木を隔てし奥庭より、幽に漏れ來る琴の音、こゝに我ありとは夢にも知るまじ、乳香兒を背負ひながら草撈りに其日の飢ゑを凌ぐ哀れの嗚ア、まだ無事に備はるゝかと差覗きしが、姿は見えず、あの恍けたる半氣違ひの下女、どこに居るかと思へば、ぶツと呵しく吹出さる、

悠々たる反身を椅子に持たせ、窓越に漏れ來る琴の音に耳を敬てながら、人しれぬ心の底

に一種の興味と無限の情趣とを含みし川徳、手に取らねど道草の花の色香を振り返りし心地、

扉を開きし主人の杉浦長藏、高岡晴行と思ひの外、ちらと一目に眉を蹙めしが、猶よく見直せし顔は例の職工、驚いて暫しそのまゝに無言の立往生、

川徳、靜に椅子を放れて満面の微笑を浮べ、

「本人ではありませんが、その名代として伺ひました、あまり突然で、あまり意外で、さういふ筈がないとの御不審があれば念のため一應、電話を、おかけ下さい、申すまでもなく向ふの棟割長屋に住んで居った職工ですがこの職工が高岡晴行の名代として伺つたのは、他に何者が伺つたよりも御當家のため、第一は令嬢のため、最も簡筆明瞭に事實の要を得て後に少しの面倒も残さず、また左右いづれにせよ萬事こゝに打切つて御安心

の出来るやうに伺ひました、甚だ失禮ながら露骨に申せば、あの高岡と、この職工とは、令嬢の幸福を祈らるゝ親御の身として、何となく以來お氣に掛る人間で御坐います

う」
じろりと額越しに主人の眞正面を睨めば、その眼光に射られし如く、おもはず顔を反けながら

「全體、高岡さんと、君とは、どういふ関係です、ちよいと會得しかねますが」
川徳ますます微笑を含みて、

「もはや、これからは一切、ありのまゝの無遠慮に話しますが、あの高岡といふ華族の弟、何等の関係もありません、をかしく妙な工合から變な意地になつたのも實は先方の勝手で、いはゆる世間しらすの殿様根生で、つまり此方は見當違ひの敵に取られた結

果、ほろ壯士三人のため、不意の闇討に逢った事もあります、なアに世の中は廣くて忙がしい、あんな料簡の狭い馬鹿を相手に際限のない喧嘩も出来ませんから、くら闇で犬の糞でも踏んだ氣で居ましたよ、は、は、とところが昨日、思ひもよらぬ場所、ふと出逢ひまして、どんな顔をするかと思れば、たゞ青くなつて、ぶる／＼震うて、居縮んだまゝ、遁ける事も出来ないといふ哀れさ、全く人間は好いんですね、寧ろ氣の毒になつて、反對に同情の念が起りました、つまり此方に何等の意地もなく第一また競争すべき何等の理由もないんですから、そこで川田徳次郎、あらためて高岡晴行の味方、味方といふも變ですが、始め間違つて敵に取られただけ猶更ら深き同情者となつて今日ここに伺ひました、實は其間に自分の潔白を表明する點もあつて、かた／＼打解けて、御懇談に出ましたが、御令嬢、その後、どうなさいました」

例の下女、まだ運よく首にもならず、幸ひ無事に引き續いて、そのまゝなりしが、自己の用でもないに今あの應接所の客を誰と問ひ、新參の取次より、高岡晴行といふ名を聞くや否、おもはず目色を變へて久子への注進、また御苦勞にも取つて返して、わざ／＼庭前を歩みながら、そつと洋館の窓越に差覗けば、風俗こそ變れ川徳の横顔、

はて不思議、かういふ筈なしと思へど、現在の主人と差對ひ、ちよいと振返りし眞正面、いよく／＼それに相違なく、あまりの案外に息の詰るほど驚いて、あつとも得いはず、暫しの棒立に動く事も忘れしが、此女また急に氣が付いて動き出せば、まん丸に肥え太りし十貫以上の身體を木の葉の散るが如くに飛んで、幾度か縁側を迂りながら、奥深き久子の部屋へ二度目の御注進、今日こそ始めての大變々々、

「お嬢さま大變で御坐いますよ、またお前の大變かと仰しやるでせうが、どうして貴嬢、

今日の大變は全くの大變で、今あの應接所へ」

久子は蒼蠅けに見返りもせず、さも腹立たしけの捨言葉、

「わかッてるよ、一度いへば分ッてるよ、騒々しいねエ」

「違ひますよ違ひますよ、申し上げた人とは違ひますよ」

「誰だッて、宜いぢやないの、そんなこと、もう一切、聞くのも嫌」

「ところがお嬢様、お聞き遊ばすと、びっくりなさいますよ、まるで夢のやうで御坐いま

す、高岡さんだとばかり思ッて居ましたに、それが貴嬢、あの川田さんですよ」

川田といふ一言に我を忘れし久子、電氣に打たれし如く身を捻ぢて、ジツと下女の顔を打

守りしが、また今更ら口惜しけに再び背を向けて、庭を見詰めながらの無言、

「お嬢様、お嬢様、その川田さんが、今までの川田さんでは御坐いませんよ、がらりと變

ッた立派な羽織袴で、どツしりと椅子に腰をかけて、頻りに旦那様と打解けた談話工合

が、どうも不思議でなりません、をりく片脛をテーブルの上に乗せて、あの凛々しい

引締ッた顔で莞爾と笑ひながら、いかにも心易く隔意のないらしい様子が、どう考へて

も腑に落ちません、全體まア旦那様の方から今日お呼びなすッたんでせうか、それとも

川田さんの方から來たんでせうか、どツちにしても今日、不意の事でなく、かね々前

に、何かの約束があッたらしう御坐いますよ」

人しれぬ夜半の寢覺勝に泣いて泣いて、もはや泣く涙もなく失戀の淵に沈みし久子のため、

また新たに罪深き川徳よ、

失戀も只その戀の叶はざる失戀にあらず、また其身ばかり捨てられたる失戀にあらず、現

在お絹といふ敵に奪はれたる失戀の極、我ながら淺ましと思へど、今は深き怨恨の種とな

りて、人しれず心の底に呪ひし久子、

立騒ぐ下女を見返りて、さも口惜しげに、じつと物凄く、わざと静に、

「お前、川田さんの來たのが、さう嬉しいのかね」

案に相違の下女、進めし膝を思はず急に後に退いての呆れ顔、

「しかしお嬢様、不思議ぢや御坐いませんか、どう考へても來る筈のない川田さんが、今

あの應接所で旦那様と、あゝ打解けて、ひそくと何か、御相談のやうですもの」

久子、ますます恨めしげの聲に力を入れて、

「お父様に、何の用があるか知らないが、わたしは、もう、用のない人だよ、今まで、

わたしは、どうかして居たのさ」

次第に打震ふ聲、

「川田、といふ名だけは、まだ覚えて居ても、その人の顔なんか、すっかり忘れて仕舞ッ

たよ、忘れさせて下すつた神様を、わたしは、有難いと思つてるよ」

心にもない言葉の哀れさ、果は目に涙を含みて、

「わたしは今まで、間違つて居たのねエ、自分の心は自分だけの事だに、それが其まゝ、他

人に通じるものと思つて居たんだよ、何といふ馬鹿だらう、自分の心を、あかの他人に、

さう知れる筈があるもんかね、汲んでくれないのが當然だワ、自分さへ悪いと思へば、

人も恨まずに済むもんだもの」

かうなるまでには半分以上の罪を背負ひし下女、實は種を蒔きし下女、今更ら聞いても居

れぬ慰め顔に、

「まアお嬢様、つまらない事を、それでは貴嬢、あんまりお心が弱う御坐いますよ、兎も

角も、今あの川田さんが、思ひもよらぬ不意に、あゝいふ立派の風で入らツしたのは、きツと何か深い理由のある事で、また旦那様も、どんな御談話なさいましたか、いづれ分る事で御坐いますから、それを、お聞き遊ばした上で」

もはや久子は堪へきれぬ苦しさ、聲を潜めながら獨走りて帛を裂くが如し、

「そんな事お前に、いはれなくツても、わたしの勝手だよ、そつちへ往ツておいで、暫時こゝへ来る事、ならないよ、なぜぐゞ／＼してるの、そつちへ、おいでといふに」

今までは何事も打ち明けし下女、かゝる時は猶更ら方と頼むべきを、それさへ見向きもせず、物いふも蒼蠅けに追ひやりて、我身たゞ一人となりし久子、もはや誰も見るものなく、机に獅嚙み付いて涙の出るだけ、身を震はして泣けるだけ泣きし後、やう／＼顔を振り上げしが、失戀の恨みも現在その人の我家にありと思へば、口惜しけれど何とやら懐かしく、

いつしか我を忘れて夢うつゝの如く身を起し、そろりと居室を立出でてまだ曇る目に朧ろけの四邊を見廻しながら、素足のまゝの飛石傳ひ、

奥庭より樹間の茂みを潜りて、應接所の窓下に身を忍ばせ、轟く胸を押へながら小耳を欖てしが、聲は聞えず、こは／＼腰を浮かせ首を伸ばして、カーテンの隙間を窺ひガラス越しに差覗けば、悠然たる川徳の後姿、父の真正面、

はツと驚いて、おもはず打屈みしが、また再び宙に吊らるゝ如く伸び上りて見れば、折しも椅子を離れし川徳の横顔、

笠を伏せたる如き破れ帽子に垢染みたる職工服を纏ひし時さへ、あれほど遅しく凜々しかりしを、今日は猶更ら見違ふばかりの羽織袴に一段の男振を上げて、すツと水際の立ちし容貌風采、

頻りに引止めんとする父に向ひ、輕き會釋もろとも強ひて去らんとする體、なほ残る言葉に微笑を含みしが、果は身を反し肩を揺りて打仰ぎながら、さも面白げに、さも心地よげに、はゝゝと高く笑ひし聲の漏れ来るや否、あはれ久子の胸に得もいはれぬ一種の響きを傳へられ、そのまゝ其處に打伏して死せるが如し、

そのまゝ其處に息絶えて死せば、戀も恨みも消え果つべきに、また苦しき心に呼び起されし久子、もはや再び差覗く氣力もなく、這ふが如くに樹間を傳うて、やうく我居室へ立戻りしが、そつと物蔭より始終を窺ひし下女も、あまりの哀れさに出られず、もし萬一いかなる事やあるかと、たゞ隠れて餘所ながら打守れば、倒れんとする片手を床柱に纏ひ付け、あまる片手の袖を顔に押當てしまゝ啜り泣きの聲、
應接所の窓下より戀に操られて我身を忘れながら、そつと差覗きし久子ありとは知らず、

その窓下に打伏して、死せるが如くなりし久子ありとは知らず、そのまゝ死せざりしを恨み泣きに夢うつゝの如く去りし久子ありとは知らず、たゞ主人の杉浦長藏に向うて椅子を離れし川徳、凛々しく緊張せる顔面なれど、微笑を含めば自然の愛敬、

「突然、伺ひまして長らく、お手を止めました、實は、かう、お心易く打解けて下さるまいと思つて居りましたに、つい、うかゞ餘計な事まで饒舌りまして、はゝゝゝ」

始めは何事かと眉を蹙めながら不安の念に襲はれし主人も、いつしか川徳のため心の底まで引付けられて、今更ら此のまゝ歸すも惜しき體、

「まア宜いぢやありませんか、例の事は兎も角、も少し、別段これといふ用のない身體ですから」

「いや、また伺ひますとも今日は、これで御免を蒙ります」

「ですか、では、どうです一度、どツかで夕飯かたぐ、ゆるりとね」

「有難う御坐いますが、當分は養生最中です、一年間お向ふで其日暮しの職工ですもの、順を逐うて段々に腹を馴らしませんと、いけませんよ、だしぬけに特別の御馳走は却ツて病氣になるかも知れません、まづ下地を拵へて置いて、その上で、うんと、奢ツて戴きませう、はッはッはッ」

無遠慮に大口を開いての高笑ひ、されど川徳の無遠慮は常に一種の意味ありて、加之も相手の感情を害せざる點は此男の獨得、

輕き會釋もろとも應接所より立關に立出で、送り出せし主人を慇懃に振返りながら、

「わざ／＼恐れ入ります」

「川田さん、いろ／＼猶お談話したい事がありますから、近々、また来て下さいませんか、

お尋ねするにも宿所をいはれないから困る、どうして宿所をいはれないんですね」

「なアに暫くの間です、ちよいと理由があつて暫時、他に居るんです、もし例の事では非、御用があれば只今、申し上げた竹町の二階借に、やはり同じ職工をして居た奴が一人、居りますから、それへ、お使ひでも、お手紙でも下されば三日目に一度ぐらゐる、必ず歸ります」

「さうですか、では、その心算で、しかし川田さん、君は實に大きい、お世辭ではない、全く大きいところのある人だ」

「は、は、は、どこが大きく見えましたか、自分では大風呂敷を廣げツ放しのみ、結びもせず、甚だ失禮いたしました」

最後の一言、いかにも洒々落落として恬淡なれど、また敵を逼さぬ殺し文句、

大風呂敷といふ一片の洒落を残して満面の微笑を含みながら、杉浦家の玄關を離れし車上の川徳、

大門を曳出されし眞正面は我古巢の空屋、その隣家は例の草刈り唄ア、ちらと横目に見たまゝ去るに忍びず、わざ／＼俣を降りて門口より差覗き、

「おかみさん、達者かね」

折しも今日また杉浦家の庭掃除に立出でんとする出合頭、見違ふばかりに變れる川徳の姿を見て、あまりの驚きに無言の目を睜れば、川徳、背に負へる乳呑兒の頭に軽く手を置いて、

「親は不運でも、親の不運だけ猶更ら此子の將來に幸福があるかも知れない、氣を長く末を樂しみに働きなさい、病院の阿爺さん其後、おひ／＼宜いかね、また何とか出来れば、

するよ、ちよいと忙かしいから話しても居れない」

いひながら懐中より五圓紙幣一枚、母親の背中与乳呑兒の間に差込めば、ます／＼驚いて、たゞ泣いて、殆ど呆れて物も得いはぬ間に俣へ乗りし川徳、後も振返らず其のまゝ走せ出せし向ふより、ひよ／＼と歩み來りしは大屋の禿頭、

氣の付かぬを幸ひ、顔を反けて過ぎ行かんとせしが、その日暮しの職工と承知しながら立退料を猫糞にした奴、出せば取らねど一文も出さぬ強慾面、時に取つての慰み半分と俣を停めて、

「おい大屋さん」

一蓮託生の貧乏長屋を相手に怒鳴り散らす外、誰に頭を下けても損のない事と心得た老爺、まして車上より聲をかけられ、聊か狼狽へ氣味に俄の腰を屈めて、

「どなた様で在らッしやいます」

川徳、ぶツと吹出しながら、

「僕だよ」

始めて顔を見るや否、あツと驚きし面上へ、冷かなる笑みを浴せかけ、

「どうだね、大屋さん、相變らず家賃の催促に忙しいだらうな、は、は、は」

「や、これは、これは」

「これはくも宜いが大屋さん、ちよいと用があツて今、杉浦の主人に逢ッて来たんだ、
ところで談話の中に例の立退料一件が出たよ、無論、受取らないから正直に受取らない
と言ッたが、大變に怒ッてるぞ、なるほど大屋さん、ありやア横領罪だよ、うかくす
ると訴へるらしいぜ、用心しなさい、わづかな事でも罪は重い、お氣の毒だねエ、さよ

なら」

そのまゝ走せ去りし後に、大屋の老爺、うまれて始めての泣き面、今更ら及ばぬ兩手を夢
中にあけながら、道路の中央で、きりく舞ひ、

大屋の禿頭を面白半分に嚇かして、そのまゝ俵を急がせし川徳、杉浦家の煉瓦塀に沿ひつ
つ横町へ出でしが、こゝに待ち受けしは例の下女、

今日といふ今日こそ、しみくと久子の悲しさ身に染みて、づうくしい平生の浮調子も
なくて、しよんほりと打ち凋れたる半泣きの顔、

加之も現在かうなりし罪は我身にありと今更ら、忠義の立て損ひを悔いて返らず、たゞ其
處に道を塞いで動きもせず泣きながら、

「川田さん、貴君、まア貴君といふ人は、どこまで酷い事をなさるんです、いッそ其俵で

私を轢き殺して下さい、せめて怪我でもすれば、少しは申譯が立ちますから」
見ても外聞もなく、わい／＼手放しに泣きながら、俥の楫棒へ寄りかゝり来る勢ひ、今までの嘘とも冗談とも思へず、これには流石の川徳も驚いて飛び降り、

「おい、馬鹿な事いうちやア困る、乃公が、何を、どう酷い事した」

「いゝえ、貴君ほど酷い人はありません、お可愛さうに、お嬢様を、あゝした上まだ飽足らないで私まで、こんな目に逢はすんでせう、それほど仕たければ、さア貴君の氣の済むやうに仕して下さい、どうぞ私は、めちやく／＼です」

實際、めちやく／＼の自暴に泣き出されて、川徳ます／＼閉口、うか／＼すれば、喰ひ付かる、かも知れぬ女、わざと俄に聲を静めながら、

「いゝ年をして何だい、往來の中央で、見苦しいぢやないか、談話は談話で分ることだ、

この川田ア貴様に俥を止められたり泣かれたりする筈はないぞ」

「ない、ないとは川田さん、それで貴君、貴君は、それで宜いかも知れませんが、お嬢様と私は、どうなるんです、どうでも勝手にしろといへるなら、川田さん今のうち、はつきりと言つて下さい、かうなれば私、お嬢様への申譯に此まゝじつと仕て居れませんから、自分の思つた通り貴君へ、きつと、何をするか分りませんよ川田さん、その覺悟で私を突き飛ばして、どこへ歸るとも御勝手次第、さアお歸りなさい」

實は例の壯士三人の闇討よりも、この晝日中に猶更ら持て餘せし川徳、もはや面倒なりと車夫への目配せ、隙を覘うて俥に飛び乗るや否、名譽の退却、急げ急げと遁け出しながら、車上より振り返りし捨言葉、

「縁のないもの仕方があるかい」

主人の婆アさん、居ながら階下よりの聲、

「どなたか、入らっしゃいましたよ」

折しも二階の惣長、これといふ用もない身を持って餘して、うとくと肱枕の晝寢、

「どツからか、お使が見えますよ」

やうく目を覺して、寢ほけ面のまゝ降りし時、はや既に人は去りて、あとに残れるは美事なる菓子折、

「それを置いて歸りましたよ、使ですから別段お目にかゝりませんが、これを川田さんへ

といふ事でね」

惣長、その菓子折を見れば、一枚の名刺に杉浦長藏の四字、はツと思はず小首を捻りて、

「どういふ人間が持つて来ました」

「なんでも抱へ車夫のやうでしたよ、まア待つて下さいといふに急いでね」

「お婆アさん、こりやア困るんだ、これを貰つちやア困るんだ、第一また本人の川徳が居ないから猶更ら困るんだよ」

「困つたつて仕方ないぢやありませんか、いくら呼んでも急に降りて來なさらぬし、使の人は急いで置いたまゝ歸つたんですもの、しかし何故、さう困るんです」

「何故でも困るよ、困るよ、大困りだ、さア困つた、先方は分つてるが、分つてる先方が此方で禁物の先方だからね、これを此まゝ貰つて置けない理由があるんですよ、ところが、僕の一料簡で突ツ返すのも困るし、いよく困つた」

困つた困つたの一點張に瘦腕を組んで、その菓子折を睨み詰めし惣長、何は儲置いても名

刺の不審、どう考へても杉浦の主人より川徳への善なし、もしや疑はれぬため親の名刺を用ひしかと、おもはず手に取れば、その裏面に萬年筆の走り書、

「わざ／＼昨日の御來車恐入候いづれ近日また御面會致すべく候へども兎も角も御挨拶のしるしまでに草々」

さては川徳、わざ／＼訪ひしかと、今更の驚愕、あまりの案外、よもやと思ひし不意に打たれて、ます／＼度を失ひし志長、

その菓子折を兩手に抱へながら二階へ上りしが、また睨み詰めて一思案、されど外に思案も工夫もなく、相談する人もなく絞り出す智慧もなく、曾ては羊羹の四方削りを演ぜし志長なれど、この菓子折には手を付けられず、何の藝もなく、やはり同じ獨言、

「さア困ツた、さア困ツた」

折しも左に風呂敷包を抱へて我家も同じ心地のお絹、門口の格子を開けて内に入れば、主人の婆アさんは剛、そのまゝ、馴れし楷子段を上りながら、

「長さん、上ツても宜しいの」

二階へ上りて見れば、いつにない無言の志長、瘦せツ面の眉を擧めて、思案に餘りし腕を組みながら、例の菓子折を睨んで、茫然とせしが、はツと氣が付いて折の上の名刺を手にと取るや否、袂へ捻ち込んで振り返りしを、お絹、怪しげに目早く打ち眺めて、わざと知らぬ顔、

「まア大變に立派な、お菓子です事」

「なアに、ちよいとね、知ツてる人から今、貰ツたんだが、實は困ツてるのさ」

「なぜ、お困りなさるの」

「それがね、お絹さん、貰った事は貰ったが、貰へば、また此方から何か返さなければならぬよ、つまらない、よけいな心配をさしやアがる」

かういふ立派な菓子折、この惣長に來るとは、第一に不審のお絹、

「長さん、貴君へですか」

「いや、川徳だよ、だが本人、居らないから、どうして宜いか猶更ら困るんだ」

「川田さんへ、どこからでせう」

「わからない、使者が置いたまゝで、歸つたんだから、わからない」

お絹、川徳と聞けば、ますくこのまゝの聞捨にもならず、慌て、袂へ入れし名刺、いよ

いよ怪しと思ひしが、まづ自分の持てる風呂敷包みを解き始め、

「ねエ長さん、怒ッては嫌ですよ、わたし、過日から暇々に、縫ッて來ましたワ、貴君の、

お著物を、どうせ、お氣に入らないでせうが、まア堪忍して、著て下さいな、あんまり

今のは、古くなつてますもの」

頓狂なれど情には脆き惣長、はや嬉し涙を目に持ちて、片手を宙に振りながら、

「お絹さん、そゝそんな事、そんな事して貰つちやア濟まない、すまないよ、すまないよ」

「すむも、すまないもありませんかね、黙ッて著て下さらないと、わたし、もう一度と來ま

せんよ」

「すまないなア」

「今、ちよいと著替へて御覽なさいよ」

「なアに今ぢやなくツても、どツかへ出る時」

「だッて長さん、袂の工合が、どうだか、わたし、袂が一番、むづかしくツて下手ですか

らね、わるければ、すぐ階下で直したいンですよ、しかし御面倒ならそのままで宜しいの、ちよいとその、袂の工合を見せて下さい」

お絹、名刺を捻ぢ込みし右の袂へ手をかけんとすれば、徳長、おもはず飛び退いて、出すには出されず、祕すには祕せず、さも苦しげの面、

今は菓子折の始末よりも袂へ捻ぢ込みし名刺の始末に苦しみ、お絹それを怪めば、ますます苦しげに片手を振りながら、

「お絹さん、こりやア名刺だがね、この名刺は見ない方が宜いよ、見せても差支ないが、見たツて、つまらないよ」

祕されるほど猶更ら見たく、おもはず小膝を進めて、
「つまらなくツても、かまひませンワ、見せて下さい、わたしが上ツて来ると、すぐに慌

て、袂へ、まア長さン意地の悪い事、どこから、どんな人が川田さんへ贈ツて来ても、わたし、何とも言へないぢやありませんか、兎も角も見せて下さいな、後生ですから」
徳長は殆ど半泣きの蓋面、

「困ツたなア、お絹さん、實は見せたくないんだよ、ぢやア仕方がない、見せる事は見せるが、ちよいとね、そこから」

袂より探り出して、わざと名刺の表面だけ、杉浦長藏の四字、

「これだからね、どう考へても不思議でならない、知ツてる通り、あゝいふ理由だもの、もし萬一また先方で間違ツてるとすれば、本人の娘か例の下女だか、それにしても今更ら、こんなものを、わざとね、第一、主人の名刺が變だよ、突ツ返されると思ツて、親の名を使ツたんだらうが、よけいな心配をかけるのが嫌だから、祕すんだよ、わるく

思ッて貰ッちやア困る」

お絹、おとなしく内氣なれど、川徳の事となれば、案外の大膽ともなり、案外の神経過敏、その名刺を手早く奪ひしが、奪ひ損ねて落ちし裏面の文字、また目早く見付けて、かるたを取るが如く、押へ付け、

「長さん、何か書いてあるンですわね」

押へしまゝ指を廣げて、その隙間より見れば、昨日わざ／＼御來車の文字、はッと其まゝ打伏して泣き入りし傍に、痣長ます／＼狼狽へながら、

「お絹さん、そゝそりやア何か、きッと何か理由があるンだよ、わざ／＼川徳が行くもンか、だまされて呼ばれたのかも知れないよ」

お絹、身を伏せて泣きながらの聲、

「だまされる、人ですかね」

この一言に痣長、ぐツと詰れば、お絹また震ひ聲、

「わたし、わたしは、どうなッても宜インですから、捨て、置いて下さい」
久子に對し、お絹に對し、どちら向いても川徳は罪な男、

子を持てる親心、わけて外に同胞もない一粒種の娘を持てる親心、いかに嬉しきぞ、いかに危きぞ、名玉を掌上に載せて薄闇の中を歩むが如し、過ッて落しはせぬか、もしや奪はればせぬかと、

加之も貧乏世帯の野育ちにあらず、百萬長者の深窓に養ひ上げし一人娘、杉浦長藏として
は一家の幸福も人生の完結も、たゞその久子にあり、

たとひ不具者なりとも、金色の光に包みて、天晴の婿を取らんとせる親心に、殆ど才色
兩全と生れし久子は、いはゆる杉浦家の錦上に花を添へたる心地、

その久子が、門前の弊屋に食ふや食はずの職工風情と顔を見合はすさへ、爆裂弾に觸れし
が如く驚きしが、あれほど執心の深き華族を嫌うて、その見苦しき職工に言葉を交せし
といふ一事には、杉浦長藏、おもはず目の色を變へて、強盜に金庫を破られしよりも猶更
の珍事出来、

されど金が物いふ世の中、内々そつと大屋の慾面に命じて、まづ危険物の取除けが第一、
首尾よく門前の職工を追ひ拂ひし後、言葉を盡して説けども諭せども、久子は無言のまゝ、
木石の如くなりて、その木石また次第に脆く朽ち果つるかと思はるゝほどの危さ、日夜た
だ鬱ぎ勝ちの一室に閉ぢ籠れば、親心ますゝ堪らず、いかにせんかと、

折しも突然に來りしは、その職工、加之も案外に高岡晴行の名代とは、殆ど一篇の小説
的、さらに驚きしは、がらりと打つて變りし風采の立派さ、よく見れば凛々しく緊張せる
顔面の男らしさ、また洒々落落として微笑を含みながら滔々たる辯才、その中に悠々とし
て動かざる態度、大膽にして細心の注意、無遠慮にして天成の愛敬、いつしか人を引付け
て放さぬ自然の力、

もはや財産を要求せざる杉浦長藏としては、今まで娘を覗ふ毒蛇の如く思ひしに、始めて
逢へば寧ろ案外の正反對、かねぐ娘のため心に描きし理想上、ピッタリと注文通りの
男、

極端より極端に飛び移りし心機一轉、そろく自己まで惚れ出して、それとなく誘ひかゝ
れば、これに對する川徳の一言、未來の妻は十中八九、もう極めて居りますと、

主人の杉浦長藏、奥の一室に妻女を招き入れて、ひそく談話、

「困ったね、また高岡の一件だが、何というても肝心の久子が、あれだから仕様がな、加之もその、使者に來た人間が案外の人間でね、猶更ら困ったよ」

「全體、どういふ人が、まゐりました」

「それが大變だ、まるで小説のやうだよ、向ふに居った例の職工だからね」

「えッ、向ふに居た職工、それは良人、高岡さんのため、いはゞ敵のやうなもんぢや御坐いませんか、第一また、久子のためには猶更ら、よくない奴で、わざと立退かしたほどの人間でせう」

ところが大違ひ、違つてるよ、人間は違つて居ないが、お前や乃公の見た目が違つて居

たね、垢染みた襪襦洋服で食ふや食はずの職工風情といふのは、向ふに居た時の事でわづかの間に風俗萬端、がらりと變つてるのみか、逢つて見て、ますます驚いたよ、随分これまで多年の實験上、いろんな人間に接して來たが、今日の若いものとして恐らく、あれほど立派に出來た男はないね、あれなら何處へ出しても安心だ、どんな難かしい事に向けても、危ッ氣なした、よほど深い理由があつて、一時、わざと其日暮しの職工になつて居たらしい、何程その理田を聞いても、いはないが、自分が闇討にまで逢つた高岡の名代として來たといふ點を、圓く角を立てず笑ひながら話した工合なにか、實に巧い、巧いばかりでなく、器の大きいところに感心したね」

「良人、さう良人、感心ばかりなすつたつて、わたしには分りませんよ、つまり、どうして、その職工が高岡さんの名代に來たんです、これが第一の不思議ですし、また名代と

して、どういふ事を」

「どうも、かうもない、結局、やはり、高岡を嫁養子にしろといふ意見を陳べたかたぐ、殆ど取持ち役に來たのさ、ついでに、自分の今まで誤られて居た、その潔白を表明しに來たのさ、加之も自分の潔白を表明する必要よりも、むしろ久子のため、お前や乃公に對して、ある意味の辯解をしに來たらしい、そして最後に、かういふ一言だ、この川田は、既に未來の妻を定めて居りますと、情もあり理もあり、いかにも見上げた男ぢやないか」

「さうですかねエ、あんな職工で」

「お前、職工々々といふもンぢやアない、あれは川田徳次郎といふ立派な人間だよ、惜しい事をした、残念な事をした、もう少し早く知ればねエ」

「もう少し早く知れば、どうなさいますの」

「や、手後れでも乃公は一策、考へる、子のために親は少々、わるく言はれても宜い、未來の妻といふ女に對しても、高岡さんに對しても、氣の毒だが杉浦長藏、あの男に惚れて仕舞ツた、しかし久子には當分まだ内々だよ」

だしぬけの不意に飄然として歸り來りし川徳、その顔を見るや否、また例の如く調子外れに慌て出す志長を制して、

「談話は後だ、ちよいと二三時間の暇を見て歸つたんだからな、暫く靜にしてくれ、晝寢するだけだ」

日夜の首を伸ばして待ち受けし志長、いかにも張合のぬけた面、聊か不平らしく、

「なアんだ、晝寝だけに歸ツたのかい」

「さういふな、こゝで一時間の晝寝は餘所で一日、ぐツすり寝込むよりも身體が休まるよ、やはり當分まだ鳥は塙で蛇は穴だ、はゝゝ世間を飛んで歩いたり、のたくツたりするのは案外、骨の折れるもンさ、お客扱ひで大事にされるよりも、おい川徳といはれる貴様の傍が宜いよ、自然に目の覺めるまで、そツと寝かして置いてくれ」

そのまゝ二階へ上りて、羽織も袴も脱ぎ捨てし大の字形、兩腕を胸に組み載せながら、白き半眼に黒き天井を見詰めしが、この鐵石に似たる健全無類の男も、よく〜綿のやうに勞れしか、すぐに鼾の聲、

階下は主人の婆アさん折しも不在、留守を頼まれし志長たゞ一人、かういふ時に神田から來ればと思ふ門口へそのお絹の影、おもはず兩手を舉げて聲を潜めながら、

「やアお絹さん、宜いところだ、戻ッて來たよ今、だしぬけに今、戻ッて來てね、二階で晝寝だ」

頻りに上を指させば、お絹も我を忘れて額越の目色、

「ほんたうですか」

「嘘をいふもンですかね、履物を見なさい履物を、つい今、戻ッて來たんだ、しかし何も話さないで、すぐ寝て仕舞ツたが、お絹さん今日こそ遁さないやうに、巧くね」

「巧くツて、わたし、どうして宜いか分りませンもの、どうも出來ませンワ」

「いつも蔭では大變に強いが、いざとなれば、また馬鹿に弱いな、過日の名刺一件で、今度もし逢へば食ひ付くと云ツたぢやありませんか、さア遠慮なく食ひ付くのは今日だ、それとも引ッ搔いた方が宜いかね、はゝゝ冗談は措いて、これほど二人が心配ばかり

仕てるんだから、實は斯うだとか、あゝだとか話しても宜い筈を、たま〜歸ッて来て晝寢は酷いよ、今日は怒ッても構はない、此方の思ッた通り、うんと言ッて見るんだな、お絹さんも黙ッて居ちやア困るよ、一處に口を揃へてくれないと」

そろ〜案外の眞面目に不平を鳴らし出せば、お絹ます〜聲を潜めて、我知らずに川徳の申譯

「だッて長さん、よく〜草臥れて在らッしやるからですよ、今まで、晝寢なンかした人ぢやありませんもの、いくら外に、どんな好いところがあッても、こゝを忘れずに歸ッて来て、こゝを安心だと思へばこそ、あゝなんですよ、やはり長さんやわたしを、まんなら他人のやうに、思ッて居なさらないんですよ」

「いカン、いカン、いカン、お絹さんは無効だ、蔭ちやア恨ンだり泣いたりするくせに、すぐに凹垂れて、さうなるんだ、過日の菓子折に添ッて来た名刺の一件も、あのまゝの、おじやんかね」

「いゝえ、あれば、わたし、どう考へても、あのまゝでは困りますワ、ですがね、わたしの口から差出がましう、そんな事もいはれませんか、あれだけを今日、長さん、しッかり聞いて下さいな」

「はゝゝゝ蟲の好い御注文だ、僕が不足をいへば、それを止めて置いて自分の不足だけ、しッかり名代に饒舌ッてくれは、よく出来た、はゝゝゝ」

「だッて、さうですもの、自然、さうなりますワ、長さんは男で、わたしは女ですからね、しかし川田さん、なぜ、あんな菓子折を貰ッたりなさるんでせう、あれは川田さんが往らした證據ですよ、そのお禮に來たんですよ、現に名刺の裏面へ、さう書いてあッたぢ

やありませんか、今更あの杉浦へ、どういふ理由で、どんな用事で、わざわざ往らッしやるんです、あの様子では近々また往らッしやるんでせう、きツと、さうですワ、それに違ひありません、全體まア何の用です」

志長、苦笑ひの両手を廣げて打振りながら、

「やアお絹さん、僕だよ僕だよ、本人は二階に寝てるよ」

折しも二階より川徳の聲、

「もう起きたぞ、目が覺めたぞ」

二人とも思はず首を縮めて互に顔を見合せ、

「お絹さん、あんまり聲が大きかつたよ」

「長さんの方が大きいんですよ」

子を思ふ闇には迷はずとも、いつしか我子のために白日青天を失うて、夕暮近くなりし杉浦長藏、

人しれぬ心の一思案、

所轄の警察署長に二三度の面識あるを幸ひ、その私宅を訪うて名刺を差出し、

「かういふものです、お手間を取らせませんから御面會を願ひたく御坐います」

区内に一二の富豪、すぐに迎へられて、一室に打通れば、主人の警視は、いかめしき髯の中より満面の微笑、何としても金の光る世の中、

「や、これは杉浦さんですか、さア、どうか、お樂に」

「お草臥のところ甚だ突然で、お邪魔いたしますが、少々、伺ひたい事が御坐いまして」

「どういふ事で、お談話に依つては、電話でも宜しいに、わざわざ」
「いや、電話で伺へる筋でも御坐いませんから、是非お目にかゝった上で、親しく、お願いしたいと思ひまして」

「なるほど、職務上に差支さへなくば、いかなる事でも御遠慮なく」

「ありがたう御坐います、實は、自分の門前にある棟割長屋で、その眞正面に住んで居りました職工三人の中、川田といふもの、一身上に付きまして」

「は、ア、川田君の事ですか」

「管轄内に於ける無数の職工中、警察署長の口より早速の敬語を用ひて、は、ア川田君ですかといふ、この一言に思はず膝を進めし杉浦長蔵、御存じですか」

「知つて居ります、知つて居りますが、あの人の事に就いて、どういふ、お尋ねですな」

「決して、悪い意味ではありませんが、あの川田といふのは全體、どんな人物でせうか、

その性行、來歴、兎も角も一應、お調べを願ひたいと思つて伺ひましたので、幸ひ御承知とあれば、猶更ら便利を得ます、職工にしては、よほど變つた人間に見えますが」

「變つて居ますとも、ありやア大變な變りものです、しかし殊更ら態と奇を好んで、あんなつたのではありませんね、あの人としては立派な理由の下に暫く職工となつたので、もう今ア止めて、他の或方面に向いて居りますが、もし貴君の銀行、その他の御關係ある會社で、お使いになるといふ事なら、この私が保證しても宜しい人物です、殆ど獨學を以て丁年に達するや否、すぐ辯護士の試験に及第したといふ一點だけでも、既に珍しい人間です、それを少しも世間に知らせず、寧ろ秘して平々凡々の職工と共に働いて

居たところは、あの人の最も深い大きい以所で、まづ今日の青年には類がありませんね、目下あの川田君の遣ッてる仕事も、實は私から半ば勸めて半ば頼んだやうなものです、が、なか／＼實地の手腕もあります、大膽にして細心といふのは全く、あれですな、夕暮の杉浦長藏、もはや我子のために愛著の闇路に迷ひ入れり、

「實は聊か、混み入った事がありまして、それがため今日まで、さういふ人間とは知りませんでした、既に一度、逢った事は逢ひましたが、お言葉を聞いて猶更ら安心いたしました、なるほど、年の若いには珍らしい人物ですな」

「杉浦さん、混み入った事は別に何はなくつても宜しいが、御安心の上、どうなさらうといふんです、どういふ、お考へで、わざ／＼あの人の事を聞きに來られたんですね」「いや、それは、また改めて委しく、お願ひに出るかも知れませんが、まづ今日のところ

では、あの川田といふ人の、たしかな點だけ承ッて、大に安心いたしましたよ、時に貴君が、お勧めになつた、目下の仕事は、失禮ながら、どういふ事で御坐いますな」

「無論、職務上には全然、何等の關係なく、たゞ自分の古い友達で、その舊友の恩人として居る或大家に多年面倒な粉擾がありましたね、それを自分に相談しられたんですが、かういふ職に居りますから、わざと避けて幸ひ、あの川田君を整理人に勧めたのです、いくら才物でも年は若し、始めの間は、どうだらうかといふ疑ひもありましたが、儲、やらして見て驚きましたね、これまで随分、いろ／＼な辯護士や種々の人が掛ッて持て餘した事ですが、案外あの一青年たる川田君の著手以來、實に快刀亂麻を斷つ勢ひだ、加之も理窟張ツたり法律臭い事は一切、やりませぬ、あれほど複雑した面倒な事を、手軽く平氣で四方八方へ當ッて相手の感情を害せず笑ひながら圓滿に解決する工合、あ

りやア智慧や手腕ばかりでない、あの人には一種獨得の何か、いふにいはれない力があ
りますよ、あの様子ぢやア、どんな難關に處しても大丈夫、どういふ事に向けても、ゆ
くとして可ならざるなした、決して頭腦の宜いばかりではありませんぜ、どツか他人に
眞似の出来ないところを持つて居ますよ、あれで一年間、ほんやりと職工になつて居た
から猶更ら面白い、は、は、は、

始めは鉛にも及ばぬものと思ひしが、手に取れば銀となり、その銀またプラチナとなりし
心地、加之もそのプラチナを拾ひし心地の杉浦長藏

もはや言葉もなく、たゞ頻りに感歎の首を打振りながら、主人の警視に送られて玄關の袂
摺、

「突然、出まして、お忙しい中を、いづれそのうち、また改めて、お禮かたぐ伺ひます」

「や、失禮しました、かう狭くツては、お俵が這入らないで、いけませんね」

門前の俵に乗らんとして、ふと何心なく向ふを見れば、ステッキを引すりながら悠々と歩
み來りしは川徳、杉浦長藏また不意の獲物に出逢ひし如く滿面の微笑を浮べて待ち受け、

「川田さん、當家へですか」

この人この家より出でしは、川徳も聊か案外、おもはず眉を擧めながら、靜に帽を脱いで
感歎の會釋、

「過日は、とんだ御迷惑に押し掛けまして、翌日また御丁寧に結構なお菓子を書いて、恐
れ入ります」

「幸ひのところ、お目にかゝつた、當家への御用は、長くなりますか」

「なアに別段、用といふほどの用もありませんが、ちよいと近所まで來ましたから、つい

でに寄ッて見たのです」

「もし、大して御用談でもなければ暫時、待つて居りますよ、どツかへ御一處に、時刻が正午ですからね、過日お約束して置いた筈だ、は、川田さん、もう覗はれたんだから仕方がない、今日は是非、遁しませんよ、は、川田さん」

川徳、立ちながら一瞬の目を閉ぢしが、一瞬間の思慮に其目を開けば、もはや入らざる言葉のない男、さらりとして恬淡の顔色、晴れやかに、莞爾やかに、軽く笑うて、

「運の善い日ですなア、は、ちやア遠慮なく御馳走になりませうか、しかし當家の主人に、ちよいと一言、すぐです、すぐ済みますから」

急いで駆け込むかと思へば、やはり悠々と立關へ、されど無言のまゝ立關の障子を開けて内に入りし様子、よほど心易く互ひに打解けたる體、やがて再び立關に現はれ、また門前

に立戻りて、

「お待たせしました、さア杉浦さん、この身體を煮るなり焼くなり御勝手次第に、は、は」

京橋の築地に一一を争ふ待合の奥、わざと庭に面せる小座敷を選びて、あゝでもない、かうでもない、たゞ料理ばかりの贅澤も、平生の金が物いふため大切に扱はるゝ杉浦長藏、

「川田さん、かういふところへ引ッ張ッて来て、さぞかし迷惑でせうが、まア堪忍して下さい、さい、料理屋は、却ッて騒がしいもんでね」

どこへ引ッ張り出されても平氣の川徳、相手が百萬長者でも無一文でも同じ態度、押し据

いちく、先手を打ッて加之も憎からぬ自然の愛敬、箸を取りながら満面の笑、

「早速、いたゞきます、かういふ御馳走が出ると、いくら堪忍しても様子ぶッて居れない人間でしてね、まことに困ります、御免下さい」

今この待合の奥座敷に杉浦長藏の目より見たる川徳、さらに何の思はせ振もなく、わざとらしき體もなく、氣取れる風もなく、入らざる遠慮もなく、七種の料理を一皿も残さず平けて五碗の飯を重ね、食後の甘味これは結構、果物また格別と、最後の茶まで三ばい代へて悠然たる顔色に輕き挨拶、

「大變な御馳走になりました、有難う御坐いますが、あまり唐突に調子の違ッたものが這入ッて、聊か腹の蟲が驚いたやうです、はゞ、はゞ、」

多年の間、さまざまの青年を試みるに、必ず始めての待合に伴ひ始めての我前に箸を取ら

せ、盃を舉げさせ、時には始めての藝妓にも取巻かせて、その態度に人の知らざる一種の經驗眼を備へ來りし杉浦長藏、ますく感歎の首を打振りながら、

「なかく、健啖ですな、よほど身體が御丈夫と見える、いくら財産があツても、いくら學力があツても、それでなければ今日の社會は無効ですよ、食物は或意味に於て、人間活動の石炭ですからね」

「ところが、平生、木ッ葉屑ばかりを燃料にして居りますから、かういふ上等の石炭に出逢ッた時は、ウンと遠慮なく頂きますよ」

「はゞ、面白い、こんな石炭で宜しければ、絶えず差上げますぜ、はゞ、時に高岡の一件ですが、ありやア前々よりの引續きもあり、第一また折角、あゝして寧ろ案外の貴君までが、わざく自分を捨て、來られるほどですから、このところ甚だ苦しい場合で

す、しかし外の事と違ひ、聊か考へた結果、實は斷然、お斷りしたので、どうでせう、
 どういふ工合に斷れば先方の感情を害せず、うまく談話が切れませうな」
 「どういふ御都合か知りませんが、いかゞです、相手の身分に御不足のある筈はなし、よ
 く口で人物本位といひますが、人物本位で鑑識の明を失するよりも、やはり瓜の畑に瓜
 を生ずる系統は自然の品定めですからね、たとひ多少の缺點あるにしろ、改めるに骨が
 折れる下司根性の曲ツたのと違つて、あゝいふ人の瑕瑾は直り易いもんです、のみなら
 ず十中の八九は、つまり境遇上の我まゝ生育と世間知らずの單純から來て居ますよ、
 をかしく働きのあるものよりは、却つて無事でせう、杉浦さん、無事で宜う御坐います
 ぜ、もはや今日の貴君としては、さのみ手腕家の必要はないでせう、既に人生一家の頂
 上に居られるンですから」

「いや、お言葉ですが、本人が承知しません、たとひ自分に不足ないとしても、娘がね、
 困りますよ、華族は大嫌ひだといふ一點張で、いくら親でも、こればかりは、さう吐り
 飛ばして押付ける事も出来ませんからね、露骨に申せば川田さん、貴君のやうな人が理
 想らしいのでね」
 川徳、だしぬけに天井を仰いで無遠慮の高笑ひ、
 「はッはッはッ、不料簡な令嬢だ、はッはッはッ」

天眼通 前篇(終)

天眼通 前篇

浪六全集 第拾八編(終)

大正十二年二月十三日印刷
大正十二年二月十五日發行

浪六全集第拾八編
定價金貳圓貳拾錢

印刷所



著者

村上信

發行者

加島虎吉

印刷者

土谷清隆

株式會社 博文館 印刷所

發兌

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
人形町通住吉町
東京市本郷區
本富士町二番地

電話長本局三六六番二六七番
振替口座東京一七四四番
電話 濱町一九四九番
振替口座東京一六三六番
電話 下谷二五〇二番
振替口座東京一六九四番

至誠堂書店
至誠堂第一分店
至誠堂第二分店

浪六先生の小説としての絶筆

時代相

四六版特製美装
紙數四百頁
定價貳圓六十錢
送料内地金八錢

「時代相」は今日の時代に於ける有らゆる階級の人間を捉へ來りて、浪六先生一流の痛快なる筆鋒を以て最も辛辣に赤裸々に遺憾なく社會各方面の内外表裏を曝け出せしもの、いかなる點にも何物にも憚からざる時代相の眞髓として近來稀に見る大文字なり。

所賣發

東京市

至誠堂

振替
東京
四七
四四

71
489

終